



鹿カ児ゴ島シマ追ツイ討タウ記キ

リ5
15685
1



15
15685

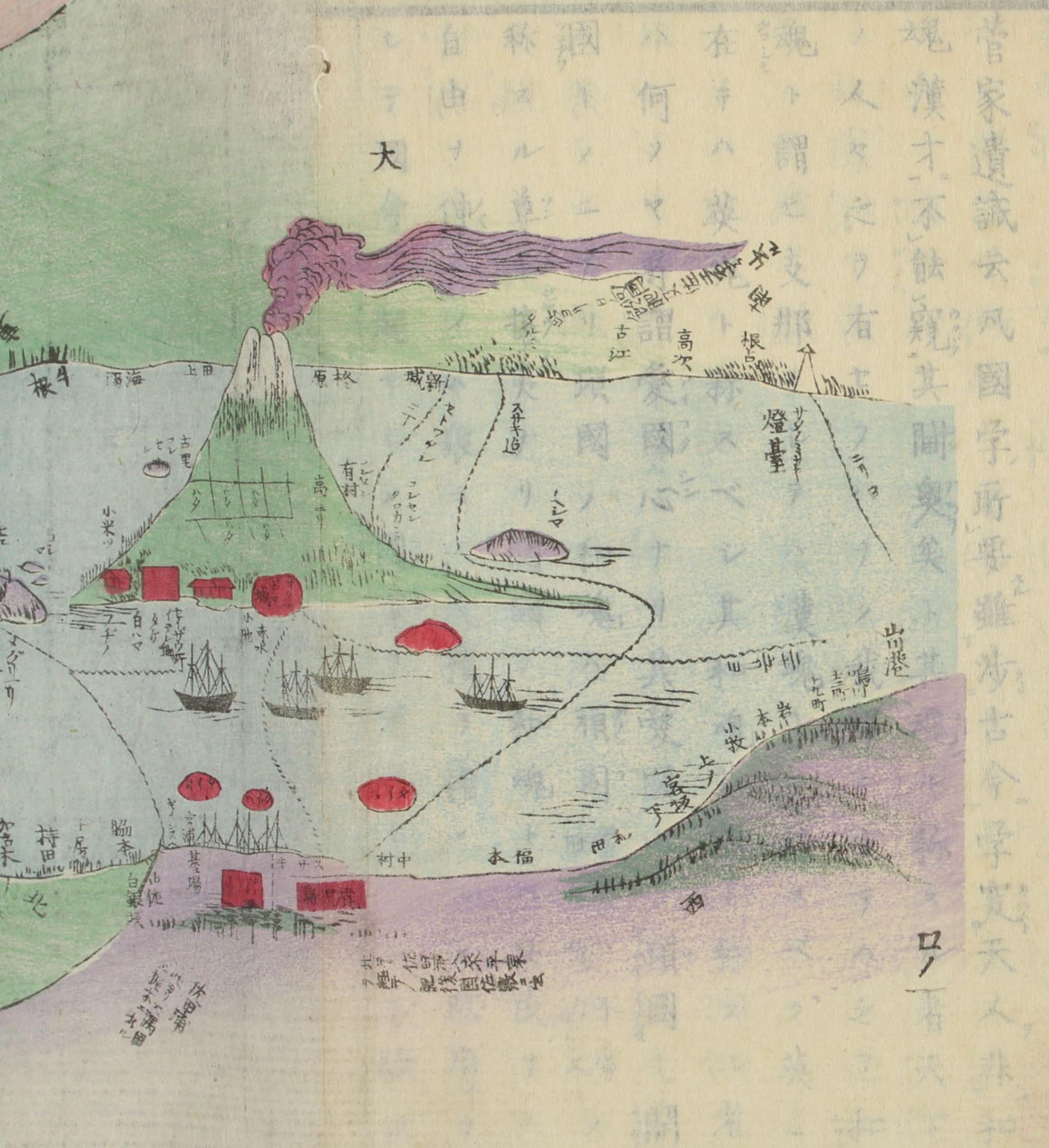
西野古海編輯

鹿兒島追討記
自一編
至七編

東京書肆 木村文三郎

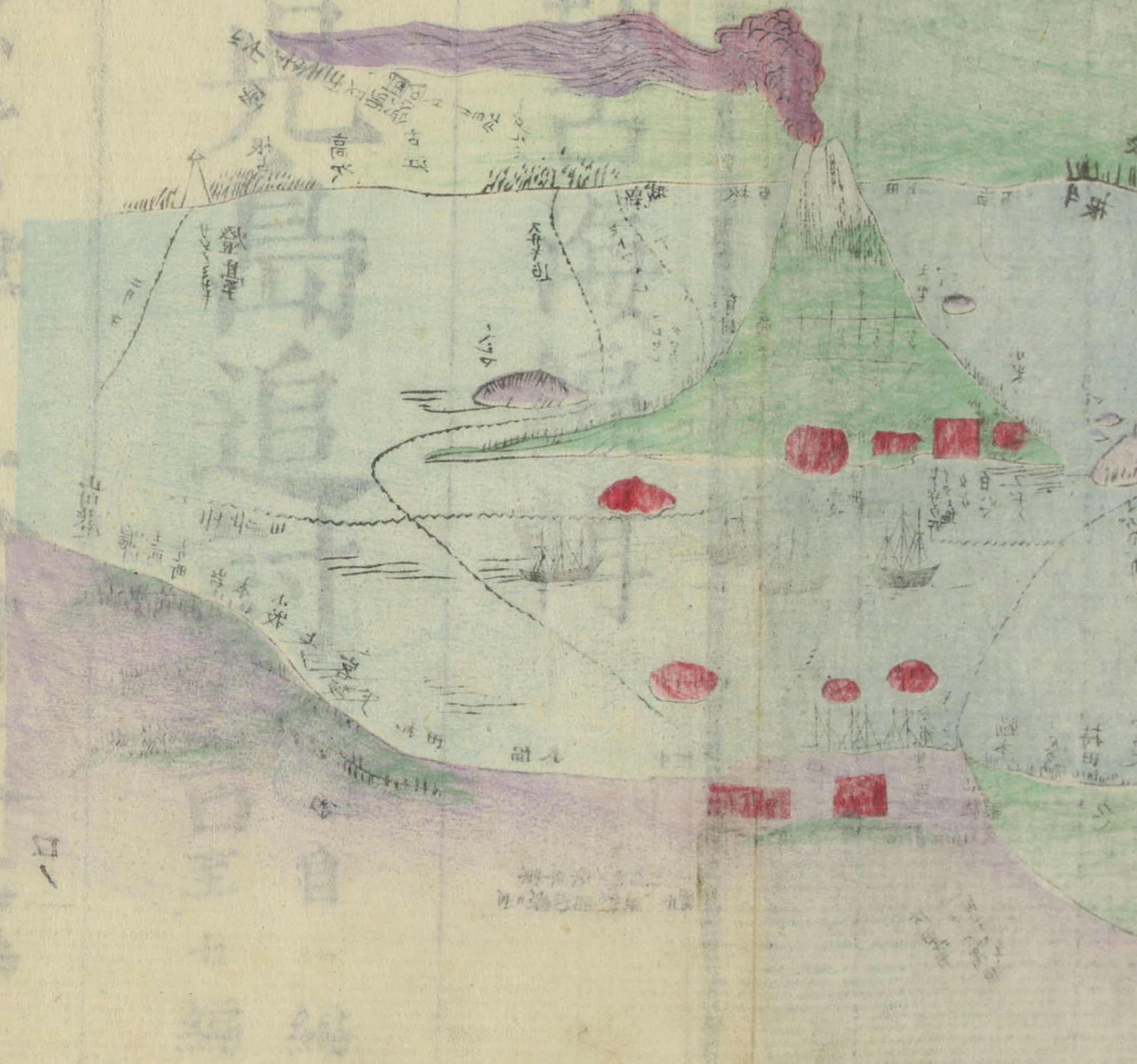
鹿兒島追討記

西野古海編輯



東京書肆 本村文三郎

大 鹿 野 追 討 記



鹿見島追討記

西野古海編輯



菅家遺誠云凡國學所要雖涉古今學究天人非和
魂漢才不能窺其間奧矣ト其魂ト称スル者天下
ノ人々之ヲ有セヌハナク我邦ニ在テハ之ヲ和
魂ト謂ヒ支那ニシテハ漢魂トモ称スベク英ニ
在テハ英魂ト称スベシ其和魂英魂ト称スル者
ハ何ソヤ好謂愛國心ナリ其愛國心ニ環國ノ開
國トシテニアリ環國ノ和魂ハ頑固當時ハ不廉ノ
称スル尊王攘夷ナリ開國ノ和魂トハ良民ヲメ
自由ヲ伸シメ公衆ヨリ民推ヲ擴メレメ政府ヲ
シテ國會ヲ起サシメ國憲ヲ定メシメント欲ス

長

ルヲ云此辨別ヲ知ラズレテ開化ト云へバ放蕩
情弱ノ事ト思ヒ和魂ト云へハ尊王攘夷ノ事ト
誤解シテ動モスレハ暴動ヲ行フ者アリ其所以
ヲ考フレハ頑固ニシテ知識ヲキト無気力不廉
耻ヲシテ尸食素餐ノ恥ヲ知ラサルニアリ其甚
レキハ昨日ハ執政ノ一ニ加ハリ當今ナカレ今
日ハ國賊ノ魁トナリ君側ノ奸ヲ攘シテ又口実
トシ暴行ヲ為スニ至ル宋呂讒ガ王安石ヲ論ス
ル辞ト大奸似忠大詐似信外示扑野内藏巧詐宜
ナル哉方今西陲ノ事起リレヨリ人々目ヲ刮リ
耳ヲ側テ書肆ノ壓ヲ覗キ道路ノ説ヲ窺ヒ起臥
彼ヲ思ヒ人々皆遇ハ必此ヲ談シ珣々トシテ眠食

ヲ安ヤス然リト雖モ明政府上ニアリ何ゾ彼ノ
凶醜ヲシテ人々ノ頭髮ヲ焦サシメ玉ンヤ是ヲ
以テ其然ル所以ヲ記載シ人民安堵ノ一助トナ
サント欲ス然レモ其地理ヲ知ラサレハ其一端
ヲ概知スル能ハス抑彼國ハ皇國ノ西南陲ニ僻
在シテ北緯凡三十一度一十分餘ヨリ三十二度
一十分ニ至リ西經凡九度餘ヨリ東京ヲ以テ一
十度一十分餘ニ至ル東西凡一十里一十八町南
北凡二十七里東ハ大隅北ハ肥後南西ニ方ハ海
ニ瀕ス山海交錯土地高低肥脊相半シ氣候温暖
卉木繁殖人其缺ク所ノモノハ米穀ナリ郡數十
三村數三百零九アリテ其東北隅肥ニ出ル殊

長門

二

峻險其海岸ノ如キハ粗平易ナリト雖モ並行シ
 ガ々キ狹路ナリ
 其鹿兒島ノ地形ハ大隅佐多岬ヲ右ニ廻テ入海
 内海ニ向フ此所ヲ海門口ト云海門嶽アリ世ニ
 之ヲ薩六富士ト唱フ右ハ大隅國ニシテ左ハ薩
 大ナリ其形袋ノ如ク海ノ幅陸地ノ二三里ヨリ
 四五里アリ夫ヨリ十三里東入レハ正面ニ又不
 二山ノ如キ島山アリ所謂櫻島是ナリ周回七里
 ニシテ古里有村黒髮湯ノ村等ノ温泉アリ此島
 ト右ノ大隅ノ地トハ海峡ノ間僅一町計ナリ
 又左ハ即鹿兒島ノ城下濱ノ町ニ櫻島トノ間
 一里ト云此辺小島三四アリ此濱ノ町ヨリ濱傳

ヒ一里許ニ磯ト云フ風景ノ地アリ所謂彈藥ノ
 製造所ニテ此濱後ハ山脈連リ前ハ海ニテ櫻島
 ノ背面ヲ見ル其体殆ト撰州須ノ浦ヨリ冷路島
 ヲ望ムガ如シ此所ヨリ彈藥ヲ積出セバ櫻島鹿
 兒島ノ間ノ狹キ所ヲ乘通ルニテ其所ニ臺坳
 アリ蒸氣船アリ若シ暴徒有テ妨ンニハ至テ容
 易キ事ニ思ハルナリ扱又鹿兒島ハ海岸直ニ
 市街ニシテ十町許奥ニテ士族町碁盤ノ目ノ如
 ク四方へ廣ク連續シタリ夫ヨリ後口ハ屏風ノ
 如ク山嶺重リ陸行ハ其山路一カ、リ肥後へ出
 ルナリ其熊本ニ走ル道ニテ險要トモ稱スヘキ
 地ハ肥薩ノ堺ナル三アラ坂ナリ是ヲ越テ熊川

誓セシムルモ良民ハ敢テ之ヲ悲嗟セサルナリ
 斯ノ如ク諸士ニ篤スルノ良民ニ對シテ獨リ諸君
 カ宜クテ以テ之ニ報ゼサルノミナラズ却テ之ヲ
 變事ニ憂苦セシメテ恟々トシテ心ヲ安スルヲ
 得ガノシムル者ハ何ゾヤ今日ノ學校黨變動ス
 ル所以ノ者ハ良民ヲシテ其自由ヲ伸シメシカ
 為メニモ非ズ公衆ヲシテ其民權ヲ保護セシメ
 シ為ニモアラズ政府ヲシテ國會ヲ起サシメ國
 憲ヲ定メシメシメシガ為ニモ非ズ我自由ヲ興起セ
 レガ為メニモ非ズ必竟スル処ハ終自利私權私
 威ヲ養存セシシガ為メナリ各自ノ私利私權ヲ享
 有センガ為メナリ各自ノ私憤ヲ排キ私怨ヲ報

也シキリ為ルルハ假設暴徒ガ恥ノ口実ヲ巧ニ
 シテ厭然其不善ヲ揜ント欲ス其肺肝ノ目的
 ハ顯然外ニ形レタルハ何ノ益カアラシム又彼暴
 徒ハ何ヲ以テ第一ノ主義トスルカ寧純乎タル
 封建論ナラハ是我武權殘夢ノ未ダ醒起セザル
 モノタルニ因リマダシモ聊怒スベキ所モアレ
 此暴徒ハ現ニ十年前ニ於テ武權ヲ不是トシタ
 ル輩ナリ此暴徒ハ現ニ封建論ニ奉還スベシト論
 ジタル輩ナリ以テ其封建論ニ非ザルヲ知ル
 バクテ其殘夢ニ迷睡スルニ非ザルヲ証スベ
 シ然ハ則其第一ノ主義トスル所ハ各自ノ掌中
 ニ天下ノ權ヲ握リ各自ノ黨与ヲ以テ文武ノ体

裁ラ司ラシメ各自ノ身上ニ
享ラ昔目ノ如クニ文武ノ威
一ハ言スルバ其黨子ノ外ハ
ラシテ悉ク其奴顔ヲシメン
ニ常私ノ一字ニ出スト論ゼ
レテ之ヲ弁駁スルヲ得ザル
暴徒ノ目的ヲヤル如シ暴徒
此ノ如シ抑維新ノ際ニ方テ
ヒシ大義名分ハ何ニカ在ル
木山口ノ諸變ニ同キモ一歩
及セバ其目的ノ主義惡ムベ
数意ヨリモ太キヲ知ルニ足
ヲ觀レハ彼暴徒ハ帝ニ日本
ルノナラス華士族ノ朋友ニ
族ノ朋友ニモ非ルナリ
右ノ拳動ハ全ク久光公ノ派
黨ニモアラス旧知事君ノ黨
少年輩ニ例ノ過激ノ頑固黨
ハ確乎トシテ瞭然タリ其證
旬熊本暴行次テ山口縣騷擾
ハ一因ニ天下大變ニ至ルニ
此時西郷氏私熟ノ生徒ヲ集
背ハ時勢ノ順逆ニ依テ決ス
ハ梅エ氏遂フベカラズ今ヤ
九州各地ノ士族及

六

臣タルノ本儀ヲ脱シ朝憲ヲ茂棄シ私憤ヲ達セ
 ントス天下ノ人心一ト之ニ靡ク片ハ實ニ國家
 ノ大變ナリ縣官ヲ暴殺スルガ如キハ大丈夫ノ
 耻ル所ナリ方今朝家ノ政令一モ道理ニ背ルモ
 ノナシ何ノ不平ヲ鳴スヘケンヤ此時ニ方テハ
 當地ノ士族上京シテ暴徒ヲ芟除シ上ハ朝廷ヲ
 護シ下ハ百姓ヲ安シ更ニ退テ躬耕力食シ以
 テ臣子ノ本分ヲ尽スベキナリト是ニ於テ左祖
 スル者一万余人大船六艘ヲ準備シ不日揚帆セ
 ントスルノ際各縣平定ニ属スルノ報アルニ依
 テ遂ニ歇ム然レトモ血氣ノ少輩伏徹セズ慨悵
 ヲ懷クモノ亦無キニアラス既ニ明治政府ヨリ

鹿兒島ニ檢閱使ヲ遣ハサレタルニ旧藩ノ兵隊
 頑固ニシテ新規ノ軍制ヲ歡ハス兼テ苦情ヲ鳴
 スヲ以テ縣官ヨリ上申シテ解散ヲ命セラレタ
 リ夫ヨリ彼等ハ益不懣ヲ抱キ居シカ今度ノ奉
 勤ハ多分是ラノ所為ニシテ少年ノ學校輩ヲ衆
 合シタルモノナルベシ抑今度ノ暴件ハ去ル一
 月三十一日同縣下海軍省造船所同陸軍省砲兵
 属廠ニ侵入シ兼テ貯蓄ノスナイドルヲ初メ銃
 彈藥若干ヲ掠奪スルニ始ルト云
 又今般暴動ニ及ビタル者ハ過激ノ少年輩ニ
 テ固ヨリ一己ノ偏見ニテ兼テ目指処有シニ彈
 藥ヲ積去等ノ処置ハ全ク政府吾輩ヲ討伐スベ

キ底意ナリト疑心遂ニ暗鬼ヲ生シ先ニスル氏
ハ人ヲ制ス我ヨリ先キニ発スルニ若ズト暴議
ニ及ヒ西郷氏ヲ頼ントテ頻ニ迫リテ統帥クテ
シテ勸メシカド同氏島津一孤ト其見ト暴論
ニスルヨリ議論一自致ス夕ト暴論家ハ暴説
ハ日ニ甚ク書子自致ス夕ト暴論家ハ暴説
キナド云フ真偽ハ決シテ詳カト持サス程
ハ確乎トシテ動カズ無名ノ暴動ハ天下蒼生ノ
悪ム所万世不滅ノ賊名ヲ殘シ現ニ一身ヲ誤ル
ト佐賀ノ江藤長ノ前原等ノ如シ汝國內ノ凡第
ニ向テ死ヲ遂グベキヤ國ノ大事アラハ外國ノ
敵ニ對シテコソ尽スベキト大義ヲ以テ論スト
イハレ承伏セザレハ決然謝絶シテ跡ヲ暗マシ

遁去セラレシト云
又一説ニ西郷氏ハ道理ニ明ナル老成人ナリト
然ラズ則其黨与ノ人々ハ豈悉ク野蠻ノ腕力者ナ
ラシヤ共ニ與ニ開明ノ急務ヲ議スベキ人ナル
ベシ何ゾ必不平ヲ懷テ熊本裁ノ二ノ舞ヲナサ
レト希望スル者ナラシヤ彼令他ニ不平派ノ暴
兇有テ一時ノ誤解ヨリ敢テ兵器ヲ上固ニ弄セ
シトスルト有モ同氏其力猶能之ヲ制定スルニ
足ルヘシト
又曰同氏ハ湯治ヨリ歸テ説諭ヲ加ヘ再ビ湯治
ニ往レタリト
島津家ノ一門ハ何レモ城下ヲ距ルト十里乃至

長巻の一

ハ

二十里程ノ所ニ土着ト云
曩頃赤龍艦薩ラニ至リ鑄造場ニ兼テ出來上リ
アル五十万余ノ砲丸ヲ積込ニ往シニ薩人之ヲ
惜ミテ押カクシ僅ニ一萬許ヲ渡シタレバ止ヲ得
ズシテ一月七日神戸へ着岸セシト云
或云朝彼士族ガ俾藥ヲ奪取タル一
所ハ滝ノ奪取ニ其彈藥ヲ奪取ル鹿兒島城下
彈藥ヲ奪取ル其彈藥ヲ奪取ル鹿兒島城下
次テ奪取ル其彈藥ヲ奪取ル鹿兒島城下
運搬ス屋續ニキテ提ル故テ持テ人ガ之ヲ送
テ不用心ノ至ナリテ途ニ遊ル如ク行ス元
所ハ運心ノ至ナリテ途ニ遊ル如ク行ス元
種々云傳テ信扱スル所ヲ和ラガレド先月二十

七日三菱會社ノ赤龍丸ガ鹿兒島ニ著シ同月二
十一日同所ノ製造所ヨリ二千個ノ彈藥ヲ積込
シ今月一日ニ又千八百個ヲ積込ニ用意ノ折柄
鹿兒島縣ノ士族ガ凡二千五百人程ヒタクト押
寄セ來リ其彈藥ヲ不殘置テ行ベシ左ナクハ一
人モ餘ヤス切殺スヘシト脅テ懸ク奪取ケレハ
赤龍丸ハ直ニ該地ヲ出帆シテ去ル六日ニ神戸
へ着シタリト云事ノミ實事ヲシテ今ア九
此舉ヤ上ニ載ルカ如ク一月下浣ニ發却スト虽
モ既ニ昨年十二月ニ至リ四萬石余ノ米穀ヲ買
入又小銃モ三万余挺ノ用意ナレモ彈藥甚タ乏
少ニ因テ如斯ノ舉ニ及ヒシナラレ

一説ニ鹿見海港ノ臺場ニアル銃器ハスナイト
 ルノ元込カ千五百挺ニ其外ノ小銃カ三千挺ニ
 ニテ都合四千五百挺ナリ又大炮ハ四門アリテ
 是ハ先年政府ヨリ取立ニナリシ時田舎ニアリ
 テ全ク見落タルナリト然トモ今度暴動ノ士
 族ハ孰モ血氣ニ役セフレタル暴客ノ此ニテ即
 へコ帯連中ナレハ号令モ嚴肅ナラス真ニ鳥合
 ノ集リ勢トモ云フ可クシテ其不規則ナルト其
 シ既ニ該地ノ汽船三國丸カ神戸ニ廻来リシ
 事ニテモ其謀ナキヲ知ルハシ若シ十分ニ速慮
 ヲ回シタランニハ急々此船ヲ出帆スルヤキヤ
 ト云者アリ如何サマ然ルトモアララン元来薩摩

ハ米ニ乏キ地ニテ真幸ト云所ヨリ運フ外ニハ
 糧道ヲシ現ニ該地ニアル米ノ商ハ僅ニ一月支
 フニ不足ニテ右ニ據テ考フレハ兵糧ノ給セサ
 ルヲ思フニ足ル又薩摩一國ヲ通算スルモ其有
 金三百万円ニハ過リルヘシ會社銀行ナトノ有
 金ヲ揮ヒクルトテ百五十万円ハ有ヘケレト其
 上ハ逆モ出来マシトノ説アリ
 海軍大輔川村君ハ彼地ノ變報ヲ聞キ否直ニ林
 内務少輔ト共ニ軍艦ニ乘込直ニ彼地ニ著岸在
 リシニ説諭ハ初ヲキ其船サヘモ奪トルヘキ形
 勢ナルカ彼地ノ縣令大山君ハ漸々ニ此船ニ乘
 移リ同所ヲ出帆尾ノ道ニカ、リテ其旨傳報シ

着港セラタリト

引用書目

朝野新聞

假名書新聞

東京日々新聞

繪入新聞

郵便報知新聞

讀賣新聞

曙新聞

大坂新聞

鹿兒島追討記卷之尾

卷之二

西野古海編輯

或一説ニ内務少輔ハ大分縣邊ヲ巡回中ナリ
 此事ヲ聞ト其俚説諭ノ為ニ鹿兒島ハ引返
 レタル由又在西京河村海軍大輔モ至急ニ神戸
 ヨリ高雄九ニ乗込ニ九州ニ向ニ出帆セラレ
 トノ電報カ去ル七日其筋ハ達シタリト虽モ虚
 実サカカナラス
 又一説ニ川村君ハ汽船ニテ彼地ニ至リ其日直
 ニ暴動士族ハ説諭ノ為メ出張ノ手筈ニテ船ノ

廻リハハツテリラ數十艘ニテ固メタル所ニ暴徒六十人余皆帶刀シテ襜高袴ヲ著シ白木綿ノ襟ヲカウ其内長ト思フバキ者四等警部ト名乗リ海軍大輔川村君ニ面謁イタシ度曰テ御船迄推参セントモフニヨリ先伺人上ニテ指揮ニ及ズバシトテ同君ニ事ノ始末ヲ上申ス然ラバ縣令ヨリ許可ヲ得タル上面謁スバシト返答ニ及ハンシニ無法ニ本船ハ進シヨリ穩カナラマ形势アルニ因テ直ニ発艦セラレクリト依テ所々ノ電報掛ノハヲ引ゴ如ク夫々

人数ヲ差向ラル諸君ニハ陸軍少将野津君同中佐岡本君同大尉山脇君外ニ書記二名二月十四日午後二時三十分ト五時トノ汽車ニテ近衛兵第一聯隊第一大隊ニ鎮臺第三聯隊第二大隊ハ横濱ニ至リ三菱ノ杜寮九蓬菜丸ノ兩艦ニテ神戸ヘ向テ進発ヤラル山口楠田ノ兩君ハ同日午後三十分ノ汽車ニ乗シ横濱ヘ著同四時東京丸ニ乗込警視局七等属櫻井義起君モ同船ニテ長寄表ハ発艦セラレ船越内務推大書記官ハ山形迅ハ佐々木齋藤ノ兩議官ハ高知ヘ出帆華族浅

野君ハ家令ヲ召連レ旧封廣島ハ下ラル
是ハ旧藩ノ者共若暴徒ニ誘惑サレシ
ト云熊本鎮臺ヨリ薩州ノ國境ハ番兵ヲ
出シタリトノ電報カ一昨日届タトイハ
風説ナレハタシカナラヌ
仁禮大佐君ハ孟春艦ニテ出奔錦貫小警視
重信權少警視神足川畑ヲ始メ警部十餘名
六百人ヲ引卒シ三菱ノ金川丸ニ乗船此内
二百人ハ佐賀ハ二百人ハ熊本ハ百人ハ福岡ハ
配サレタリト云内務卿大久保君ハ目下部大書記
官外一人玄武丸ニテ神戸ハ向テ出帆サル
或云綿貫中警視カ大中小警部数名并巡查六百

人ヲ引卒シ警部ハハビストル巡查ハハスナイ
トル一丁宛ノ準備ニテ三菱ノ豊島丸ハ乗込ミ
出帆セラレシカ此一行ハ先ツ長崎ハ出帆同所
上陸ノ模様ニテ熊本佐賀福岡ノ三所ハ夫々配
分セラル見込ナル由右ハ全ク地方ノ不平士
族カ薩摩ノ事ヲ聞テ騒ギ出スモ知レ又故其警
備ノ為ナラント云モノモアレド何カ事アル日
ニハ種々ノ浮説ノ多キモノニテ悉クハ信ジ難
カルヘシ
又陸軍中將議官柳原君中島信行君島津久光公

家令楠原氏モ同船ナリ
又大坂ノ鎮臺兵十聯隊ノ一中隊出兵アリ十五
日ニハ第八聯隊ノ内一大隊又同隊ノ後備兵二
大隊ノ内一大隊操出シニナル同砲兵ノ内一大
隊大砲六門ヲ卒キ花形小尉セウキが出張サレ給養戢
器械戢ノ官員三十餘名姫路分營ヘ向ケ出張サ
レタリ
鹿兒島表ヘハ有栖川ノ宮柳原義官ギタカヲ副ソウヘ説諭
ノ為ニ差遣ハサル、筈ニテ汝國家ノ柱石玉石
ト混ズルナキ様盡力セヨト 勅命アリテ明

治九ニ衆込軍艦一隻并騎兵ホ護送シ出祭ノ処
二十八日午前熊本ヨリ鹿兒島ノ暴徒水保及人
吉ノ兩街道ハ押出ノ模様アリ又宿割トミヲ同
縣士族体ノ者十人程熊本縣下ヘ相越シクワト
ノ電報到着セシニヨリ断然征討仰出サレタリ
トナシ
御布告
鹿兒島縣下暴徒兵器ヲ携ヘ熊本縣下ヘ乱入
跡顯然ニ付征討被仰出有栖川一品親王ハ征討
總督被仰付候旨本日行在所ヨリ電報有之候付

此旨為心得相達候事

明治十年二月十九日

右大臣岩倉具視
官院省使府縣

征討ノ命有テヨリ巳ニ三日未夕開戦ノ報ヲ聞
ズト虽モ鹿兒島ノ暴徒ハ巳ニ熊本ニ乱入シタ
リトアレハ臺兵ハ豈之ヲ坐視シテ其志ヲ逞
スルニ堪ヤ其必ハ現ニ對陳ノ地位タルヲ推
測邀戦ヲ主トスル乎果シテ防禦法ニ出テ扞守
ヲ旨トスル乎暴徒ハ天草熊本豊後ノ三道ニ分
兵シテ併追スルノ状アリト聞ク此其分兵ハ何

地ヲ集合點トシテ寄セ來ルカ何イ法方ヲ以テ
各方兵ノ聲援ヲ通ズルカ那邊ヲ以テ戦地ハ豫
算スルカ范トシテ其動靜ヲ知ルニ由ナク又我
官兵ノ方トテモ只ノ幾大隊幾聯隊ヲ繰出ス
見聞スル迄ニテ其要衝ヲ扼シ切所ヲ固ルノ方
畧ハ固ヨリ軍機ノ秘密ナレバ同ク其運動ヲ探
ルニ術ナシ茲ニハ只其風説ヲ記載スルノニ
今度暴挙ノ巨魁ト云フハ島津家ノ家令タリシ
内田正風ナル者ナリト云例ノ街説信ジカタシ
或ハ鹿兒島暴徒ノ巨魁ハ西郷氏
一説云今般西
郷氏献言ノ筋

有之候ニ付テ兵卒ヲ引卒シ上京致シ候条此段
豫メ御通知候也ト云フ書面アリ一縣令ヨリ
九州諸縣へ出セシト云フ風説アリ虚妄ニ相違
テ兵符ヲ癸スルハ叛ニアラシテ何ゾヤト是
等ノ事ヲ知ラザル人ニ非ザラハ若シ実ナラハ
全ク暴徒ノ作為セリト云々
連ルハナキ答ナリト云々
ヲ始メトシテ桐野篠原池上長山拈田別府等ノ
諸氏ナルヨシ此内西郷桐ノ二氏ハ自ラ軍配ヲ
トリ兵士ヲ引卒シテ日向へ出奔シタリト云
報知新聞千号
又暴徒ハ二千八百人程ゾ、三方ニ分レ一隊ハ豊後
地一隊ハ肥前天草一隊ハ宮地ハ八代ノ向ケ線

出ニタリ
又云長崎ヨリノ報ニ鹿兒島賊肥後國界ヨリニ
手ニ分レ一手ハ本道ヨリ一手ハ間道ヨリ進ム
八代ニテ一合ス昨廿一日午前十一時熊本城
下ニテ開戦其後ノ模様分ラズ
又云賊徒ノ巨魁桐野ハ熊本、篠原ハ肥後ノ茂
木浦ハ村田ハ豊後口へ各黨類ヲ率テ押出シタ
リト昨日電報アリシト云ハ信ジ難キコトナシ
ト十九日午後ニ到着セシ電報ニテハ暴徒等ハ
其勢ヲ三手ニ分チ一手ハ水股肥後國韋北郡

薩摩ノ塚ヨリ熊本ハ向テ押寄セ一手ハ海ヲ渡
テ天草島肥後八代ノ西北海中ニ在テ大小四島
周田七十里十一丁ヨ其南ニアル小島ヲ下島ト云
ト云周田六里二十七丁ヨ其東ニアル大島ヲ上島
砥岐ト云周田三里四丁ヨ其東ニアル小島ヲ正
大矢野島ト云周田三里四丁ヨ三角岬ニ近キ大島ヲ
周田十五里ヨ向ヒ令一手ハ豊後ニ截リテ鶴崎
ニ向タリト

又鹿兒島ノ士族多人教銃器彈藥等ヲ携ハ熊本
本縣下ニ來リテ官内ヲ通行セントテ掛合シニ
右ハ決シテ相成ラヌ旨ヲ縣官ヨリ答ヘラレケ
レバ士族曰西郷氏ハ陸軍ノ大将ナリ其命ヲ受

テ銃器ヲ携帶スルニ咎メラルハ善ハナント
街説ヲ聞ク是等ガ反跡分明ナルノ一證ナリ

ト十九日二十日ノ兩日警視局ヨリ巡查カ千人
新橋ノ停車場ヨリ横濱ハ出發三間權少警視槍

垣權少警視ノ兩君西京丸ニ打乗豊後ノ鶴崎肥
前ノ長崎ノ兩所ハ向ハレ此外太中小警部モ數

名發船セラレト云
陸軍出兵ハ御用金ハ會計監督清水川口ノ二君

豫受メ十九日九州サシテ出帆ニ成ル扱又暴徒ハ
肥前水俣口ヨリ一里半余熊本縣下へ繰出シ午後

長崎の二

七

九時頃夜襲シタリト又云二千余人余長寄ヲ襲撃
セントスルノ形状アリト又云同所茂木浦へ上
陸セントスル所ヲ十四五名捕縛ニナルト
又云二十日鹿見島ト熊木トノ境ニテ劇戦ヲナ
スト
又云九州地方ハ派出ノ巡查ハ兵隊ニ編入サレ
シト
東号浅間号ノ兩艦ハ諸器械ヲ積入神戸へ向テ
横濱ヲ出帆筑波口進ノ兩艦モ修復既ニ調ニタ
レハ不日ニ出帆スルト云

西京丸ハ鎮臺兵巡查并ニ佐々木議官ヲ乗セテ
横濱ヲ出港シ九州丸ハ近衛隊及ビ器械ヲ乗
セテ夜解纜シ扶桑丸ハ同日午時二時頃品川ヨ
リ横濱へ入港セシニ直ニ御用船トナリ糧食其
外石炭等ヲ夥シク積込夜ニ入テ兵隊ヲ乗ント
テ水樽五十樽余ヲ積込タリ又隅田丸ハ輜重兵
ノ機械ト鎮臺兵トヲ乗セテ二十一日福岡ノ老
候黒田君ハ二十日旧藩士井上良一ヲ具シ西京
ニ向ヒ出立カレ又内務大藏ノ兩省ハ夜中無提
灯ニテ通行スルヲ嚴禁サレ又西京御所内ハ

俄ニ電線ヲ架ラレタリト又東京小石川砲兵本
 廠ニテハ晝夜ノ別ナク小銃ヲ製造セラレ
 野津陸軍少將ハ四大隊ヲ率キ三好陸軍少將ハ
 五大隊ヲ引率シテ二月二十日神戸港ヲ出帆シ
 九州地へ出発サレタリ
 秋月ヨリ脱走セシ士族七名ノ内牟田鹿雄ハ既
 ニ捕縛ニツキタリト
 二十日暴徒ハ豊後へ乱入シ別軍ヲ以テ海ヲ渡
 リ天草島ヲ奪ハントセシカバ官軍之レヲ防禦
 スルコト最重ナリト

西京ニテハ今度ノ一件ニ付テ御所内官内省中
 ハ太政官代ヲ設ケラレ議事ヲ御開ニ成タトス
 日々出席ノ御方ニハ太政大臣三條公内閣顧問
 木戸君内務卿大久保君陸軍卿山縣君工部卿伊
 藤君陸軍中將鳥尾君海軍大輔川村君此外議官
 書記ノ諸君ナリト
 大平九ハ去ル八日鹿見島へ投錨スルヤ否ヤ直ニ
 番兵ヲ附フレ出港ラ差留ラレタル故ニ此舟ニ
 乗込居ラレクル木梨内務少丞ヨリ大山縣令へ
 照會アリシカドモ何ノ返答モナク空ク港内ニ

船ヲ繫ゴテ日ヲ送ル然ルニ十六日ニ至リ大山
縣令ヨリ木梨氏へ今度ノ事件ニ付政_府ノ御届
書ヲ托セラレタレハ翌十七日木梨氏ハ田付廣
瀬ノ兩人ヲ招キ前件ヲ具ニ演説シ十九日ニ同
港ヲ拔錨シテ神戸へ着シタリ同船カ鹿兒島港
ニ滯泊中ニ見ル所該地ノ様子ハ郵便局ハ既ニ
鎖シ同局詰ノ某ハ長崎肥後其他ノ縣廳并ニ鎮
臺ハ使トシテ出立シ都合二十名程縣令ノ命ヲ
受テ各縣ハ出張シタリ十五日ヨリ十七日迄ニ
合テ一万四千程肥後へ向ツテ繰出ス太平丸

是等ノ様子ヲ見終リテ無事ニ該地ヲ解纜セ
シハ大山縣令ト木梨少丞ノ兩氏ガ力ヲ尽サレ
タル故ナクト云
日向地方ニハ延岡高佐土原高鍋等ノ兵ヲ指揮
シテ佐土原ノ旧知事ノ三男町田啓次郎ハ云青
年ノ壯者ガ戦將トナリテ宮崎ヲ根拠トセリト
(同上)
征討大總督有栖川親王ハ去ル二十日大阪ヲ御
出發アラセラレ野津陸軍少將ハ參謀トシテ四
大隊三好少將ハ五大隊ノ兵ヲ率テ一同ニ神戸

鹿兒島



鹿兒島追討記卷之二

出帆セラレシト大船ハ其ノ中ニ
 愛知鎮臺ハ西京ノ護衛トシテ繰込ニナリ西京
 ハ嚴重ナリト又兵庫碇泊ノ亜米利加軍艦三艘
 一艘ハ兵庫ノ近海ヲ警備シ一艘ハ横濱近傍ヲ
 警衛セン一ヲ御間届ニ成リ輜重兵ニ関シタ入
 用ノ品ハ筑前博多ニ事務扱所ヲ設ケラレ東京
 ヨリ差送りニナルト云

鹿兒島追討



鹿兒島追討記卷之三

西野古海編輯

今度西南ノ一舉ニ付テ竊ニ其事情ヲ按スルニ
 各地方悉ク旧時ノ藩力ヲ墜失シテ復々勤クヲ
 得ザルニ當リ維新ノ初メ一振セル實力ヲシテ
 敢テ傷損セシメテ之ヲ旧藩地ニ蓄ヘ世ト共ニ
 勤カズ人ト共ニ進マズ猶十年前ノ一強藩トシ
 テ隱然一頭首ノ支體ヲ保存シ政府ト對立スル
 モノ、如シ是レ常ニ憂慮スル所ナリレモ天ナ
 ル哉時ナル哉彼已ニ自ラ来リテ火ニ入ントス



ルノ勢ヲ示セリ征討ノ鳳詔一下ニテ王師已ニ
 叛境ニ迫リ暴徒兵ヲ分ツテ三道ヨリ進シテ
 以テ二月二十一日開戦ニ及ブト夫勝敗ハ非常
 ナリ一勝一敗兵家ノ甚懸念セサル所ナルモ時
 機ニ関シテ一勝ノ全勝トナリ一敗ノ全敗トナ
 ルトナキニ非ズ今回ノ戦ノ如キ未タ斯ル切要
 ノ時機ニ接スルニ至ラサル如キモ初開ノ一
 戦ハ亦唯其勝敗ノ如何ニ関ス僅カニ非サルナ
 リ故ニ朝野ノ七人ハ初戦ノ勝敗孰レニ在レヲ
 聞ント欲シ手ヲ歆テ佇立セリ然ルニ昨曉ノ

電報ニハ二十一日午後一時戦端ヲ開キ官軍勝
 利ナリト初戦ノ勝利王師ニ在テ暴徒敗績シタ
 レ實ニ祝スベキノ事ナラズヤ然レモ暴徒其
 境外ニ出テ戦フ假令初戦ニ之ヲ破ルモ未タ全
 勝ニ非レバ戦勝テ曾纓ヲ結バハ兵家ノ守ルベ
 キ金言ナリ去ナガラ初戦已ニ吉報アリ南風ノ
 競ハサル知ルベシト雖モ慄悍ノ將士武畧ニ在
 テハ決シテ蔑如ス可キニ非ズ之レニ當ルモノ
 宜シク憤興セサル可ラズ况ヤ彼レ既ニ舊藩ノ
 カニ收テ完然保持セリ加之頑然墨守スル所ア

リテ結合セリ其鋒決シテ鈍ラサルベシ然レモ
王師全捷ヲ得ルノ日ハ蓋シ封建ノ餘毒悉ク消
尽レテ真正ノ實カ即チ人民中ニ勃興ノルノ秋
ナルベシ

熊本ハ暴徒ニタル暴徒ハ二十一日午後四時頃
ヨリ敢テ進マズ同所ノ城下ヲ距ル一二里許只
炮臺ヲ聞ノミナリト又暴徒一中隊程コウケト
云所ハ屯集ス鎮臺兵嚴重ニ手筈ヲ定メ戦争ノ
タメニ市中ヲ大半焼拂フト云然ルニ暴徒四五
百名顕出シタルヲ大坂廣島ノ兩臺兵對戦シテ

微塵トナス又肥後ノ國境マテ暴徒セシ敵兵ニ
ハ魁主二人有ト云鹿兒島熊本ノ兩縣ヨリ事實
上申セラレシトカニテ有栖川ノ宮様ハ十八日西
京ヲ御發陳ニナル泉州岸和田ノ士族ハ十八才
以上四十五才以下ノ者共連署シテ暴徒攻伐シ
タキ昔ヲ歎願スト
伊東海軍少將ハ春日艦ノ長トナリ神戸ヨリ出
帆川村海軍少輔モ筑波艦ニテ戦地ハ出帆有馬
海軍中佐モ敵地向テ出張サレ議官ノ中島河野
ノ兩氏ハ鹿兒島ハ發向ノ処事故有テ暫時御見

合ニ相成板垣君ハ立志社長林氏ト共ニ西京ノ
清魁樓ヨリ土州へ出發大坂府ヨリハ探索ノ夕
ノ三等警部二人七等警部五人一等巡查十人ヲ
長寄へ遣ハサレタリト云

已ニ前ニ記載セシ有柄川熾仁親王ノ征討大總
督ニ任セラレシ時左ノ勅宣アリシト

卿二品親王有柄川熾仁

朕卿ヲ以テ鹿兒島縣逆徒征討總督ニ任シ陸
陸海一切ノ軍事并將官以下ノ黜陟賞罰擧テ
以卿ニ委ス卿黽勉征事速ニ平定ノ功ヲ奏セ

明治十一年二月十九日

奉物

太政大臣三條實美

二十一日久留米ニ於テ捕縛ニナリシハ十三人

ニテ翌日茂水浦ニテ三人彼等ハ伺レモ檄文ヲ

所持シタリト定メテ各地ヲ潜行シテ觸レ知ラ

ス為ニラント云

又兩三日前ニ拘引ニ成シ鹿兒島士族吉川次郎

ハ曩ニ大久保内務卿ノ執事ハリシカ免角身持

悪ク又不審ノ事情多カリシカハ暇トナリ東京

ニ在リシカ其後ノ擧動モ怪ハキト有トテ竊

ニ探索セラレシニ果シテ今回賊徒ニ味シタル
下頭レテ如斯ト此外平山睿ヲハシメ四五名同
暴徒ニ典シ熊本へ走ラントヒシカ是モ同シク
拘引サレタリト
二十三日夜參軍山縣陸軍卿明治丸ニ乗シ下ノ
閣へ下向サレ第一旅團野津君ハ廿二日神戸ヲ
出發サレタリト
西御中將ハ陸軍卿ノ代理トシ少輔ハ六坂出張
井田少將ハ第一局長兼勤曾我少將ハ東京鎮臺
司令長官兼勤仰ヒ付ラレタル由

田高知藩知事山内君ハ先般
天機同ヒトシテ西京へ參向サレタル処即今旧
藩地穂カナラサル由ニ付直ニ神戸ヨリ出帆サ
レタリト云フ
日本港ニ碇泊セシ魯國ノ軍艦ハ先頃残ラズ米
國へ赴キシガ今度ノ時爽ニツキ樺太ヲ護衛ノ
タメ電報ニテ呼戻シニナルト云風聞
野津少將ハ步兵ニ大隊炮兵一大隊ヲ率ヒテ瀬
高近繰込三好少將ハ三大隊ヲ率ヒテ久留米へ
進入セラレタルヨシ交戦ハ何レ今明日ニ在ル

へレ云
行在所第二號ノ御達
鹿兒島縣下逆徒征討被仰出候ニ付右逆徒自然
各地方へ遁逃或ハ潜匿可致モ難計候條管内要
衝ノ地ハ勿論出入船舶等取締相立嚴密搜索ヲ
遂ケ捕縛可致此旨相達候事

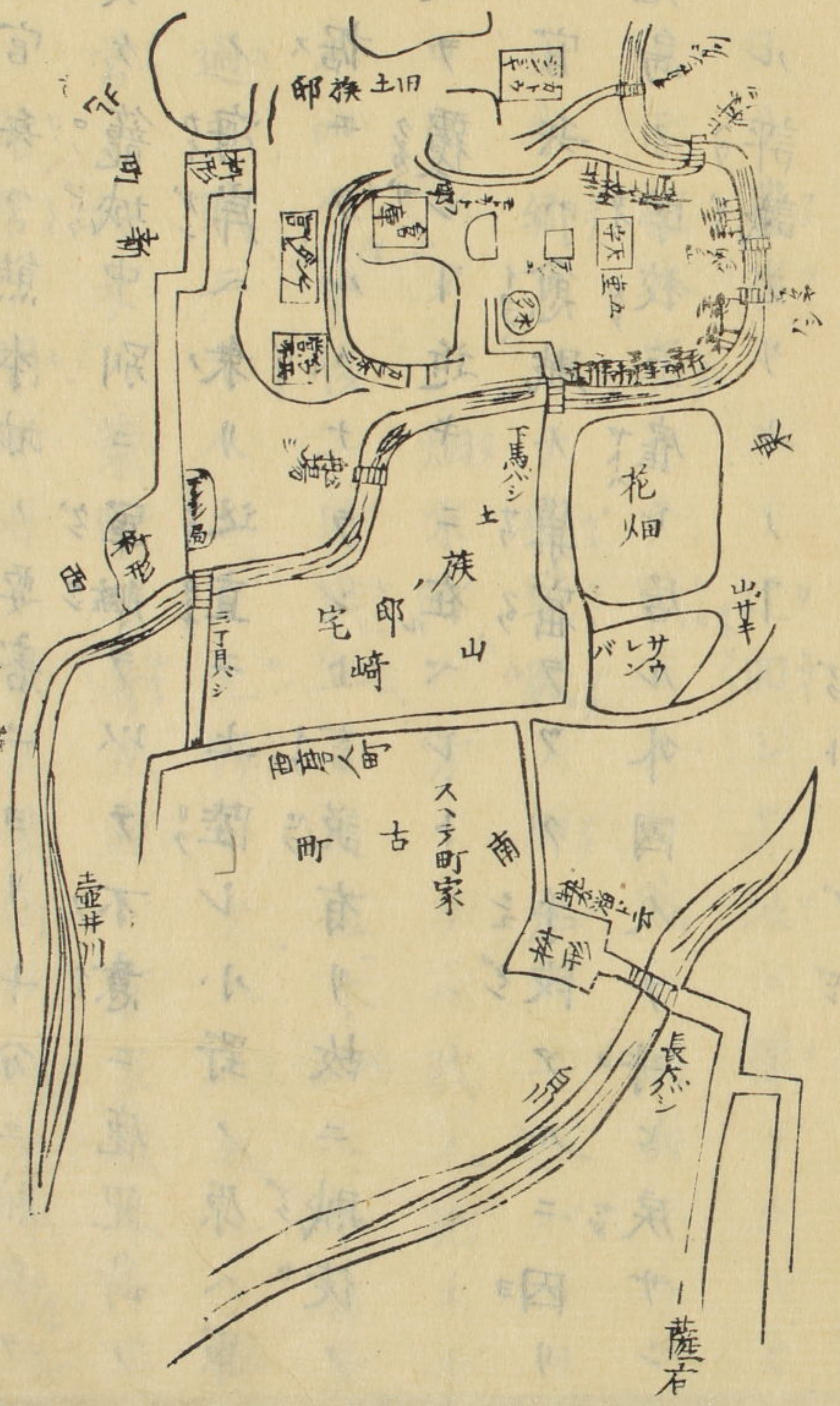
明治十年二月廿九日 太政大臣三條實美

二十一日賊兵ハ熊本鎮臺ヲ四方ヨリ取圍ミ熊
本城ノ南ノ方ヨリ争戦ヲ開キレニ賊兵官軍ノ
力メニ散ハニ討ノリレ討死三十二人有リト云

又城ノ東ヨリ押寄セタル一軍モ同ク敗北レテ
即死三人暴徒ハ薩州街道ニ當ル川尻香崎ノ辺
ヲ本陣トナシタルカ前日ノ戦争ニテ散々ニ打
負ケ本陣へハ歸ルヲ能ハズニ里許逃走レテ植
木ト云所へ落集レ翌日再ビ進戦セシニ官軍ハ
豫テ期シタルヲナレバ福岡ヨリ繰出シタル官
兵賊徒ノ後へウチ回り鎮臺兵ハ城内ヨリ突出
シテ狭撃ス因テ賊兵堪ズレテ潰散スル処ヲ西
ノ方花岡山ニ備タル官兵頭ニ頭出レテ三方ヨ
リ一時ニ激突シタリシカバ以テノ外ニ敗散ス

ト云フ
 又云午前五時賊兵ハ熊本城ノ四方ヨリ攻メ
 来リ賊將篠原一隊ヲ率テ安政橋ヲ渡リ坪井町
 へ掛リテ押寄セ来ルヲ官軍ハ邀撃テ戦フ処ニ
 城中ヨリ賊ノ中堅へ向テ散弾ヲ乱発セシカハ
 賊兵堪ズ散乱スル折カラ恰モ好シ高橋ヨリ上
 陸セシ官軍ハ花岡山ニ打上リ賊軍ヲ目下ニ見
 下シ城中ノ隊兵ト前後ヨリ死力ヲ尽シテ打立
 れハ賊軍終ニ防ギ得ズ四途路ニ成テ敗走セ
 リト

熊本城下畧図



又云官兵ハ熊本城ノ要害ニヨリ十分ニ賊兵ヲ引受ケ籠城中別ニ軍艦ヲ以テ不意ニ鹿兒島ノ谷山ノ海岸へ乗り込直ニ上陸シ小野ノ原へ軍營ヲ据エラル、ナラント言説有リ故ニ賊徒ノ巢穴ヲ覆ン下近キニ在ベシト

又云官兵ハ愈賊ノ巢窟ヲツク手段アルニ因リ鹿兒島ノ学校ニ雇レ居ル外國人ヲ呼ヒ戻サントスル評議アリトノ

又云二十二日鹿兒島ノ賊徒ハ豊前國田ノ浦及文字辺へ船ニテ廻リタルニ純キ豊津ニ在ル兵

隊ニノニ分レテ出張セシ由

又云熊本ヲ去ル下七里山鹿ニ繰込タル賊徒ハ日向ヨリ豊後ニ入り迂回シテ此ニ據リタルナラント亦植木宿ニテ戦ヒタル賊ハ此兵ナラント又云本郷口ニテ劇戦賊ノ即死卅二人バカリ北ノロセンダン畑京町ノ方ニテハ賊ノ死スルモノ三四人午後三時戦止ト又植木地へ午後第五時過ギ賊三十人ホド先鋒ニテ入込然ルニ福岡分營ノ兵木ノ葉町へ着先發ノ官軍植木ニ主リ賊ノ潜居ヲ聞キ出シ木ノ葉町ノ隊兵ト通ジ

合セ繰出ス賊ハ兵三百許繰込六時過植木へ向
 フ外ニテ戦ヒ官軍六人傷ヲ負フ今ニ戦ヒ止マ
 スト云ク
 又云熊本ノ鎮臺ハ旧牙城ニアリト聞リ果レテ
 然ラバ金城鐵壁ヲ以テ久シク天下ニ聞エシ堅
 城ナリ而レテ之ヲ守ルノ官兵ニハ守城ニ利ア
 ルノ大炮若干門ト小銃数千挺アリ此堅城ニカ
 カリ以テ死守ヲ逞ウセバ彼戦具砲煩ニ乏キ禦
 悍ノ乱人焉ゾ之ヲ一呼吶喊ノ中ニ撃ルヲ得
 ンヤカクニ官府ノ大兵京撰ヲ發シテ赴キ救フ

者長崎ヲヘテ熊本ニ達スル將一北二日前後ニ
 在ント鎮臺ノ戦兵ヲシテ旧城ヲ固守セシムル
 三四日トラシメバ此等ノ援軍相與ニ力ヲ合シ
 テ乱人ヲ夾撃スルハ必然ナリ茲ニ至テハ禍乱
 平ノ一日有ン固ヨリ患ニ足ラズ政府ト乱人が
 初戦ノ勝敗ハ大ニ天下人心ノ動静ニ関係ヲ有
 スル者アルガ為ニ熊本ノ鎮臺ノ官兵ガ其戰略
 ヲ守城ニ決スルヤ或ハ野戦ニ定ムルヤハ夙ニ
 策士ノ懸念スル所タリシガ聞ク所ノ如ノバ官
 兵初戦ニ勝利ヲ得テ乱人必ク沮ム色アリト而

テ其戰略ハ突ニ守城ニ出タル者ノ如シ果シテ
 然ラバ容易ニ乱入抜ク能ハズシテ官軍四集シ
 事患フルニ足ザルニ至ント思ヒシカ果シテ其
 如ク暴徒ハ境ヲ越エテニ手ニ分レ一手ハ本道
 ヲ進ミ一手ハ間道ヨリシハ代ニ於テ合衆シ自
 川口ヨリ熊本城下ニ迫シガ鎮臺兵ハ城ニ籠居
 シテ間近ク寄リシ時ニ衆ト直チニ劇ク連發セ
 シ大小砲ニ打シラマサレ死傷モ多ク城下ノ外
 へ引退キシトノ風説ナリト亦謂疲敵于堅城之
 下而内外撃之其勢如驚鷲之搏鳥雀トハ之ノ謂

辛

御達

征討總督有栖川ニ品親王今廿四日進發候旨行
 在所ヨリ電報有之候條為心得相達候事

明治十年二月廿四日 右大臣岩倉具視

陸軍卿代理大山陸軍少輔ヨリ左ノニヶ條陸軍
 一般へ達セラレタル由

今般征討總督本營ヲ大坂ニ被置ニ品親王有
 栖川熾仁ヲ總督ニ陸軍中將山縣有明海軍中
 將川村純義ヲ參軍ニ被任候旨電報有之候條

為心得相達候事

陸軍中將鳥尾小弥太 行在所々属軍人取扱
被仰付候旨電報有之候條此旨相達候事

○九州ニ在ル官軍ノ總數ハ熊本鎮臺トモ併セ
テ惣數歩兵十大隊ニ炮兵三大隊ニテ其他巡查ノ
兵籍ニ入リシ者二大隊ニ餘ルヘシ是等ノ兵ヲ
併セテ一兩日中進撃ニ及フヘシト云フ

○鹿児島ノ帆前船紅葉丸ハ肥後國日奈久ノ沖
ニテ龍驤艦ノ為ニ逮捕セラレシヨシ
二十三日ハ代沖ニテ龍驤艦ノ策ニ中リ賊船迎

陽丸ヲ奪ヒ取り平戸近海へ引キ寄せタリトノ
報知アリタリ

○西郷桐野篠原等位記褫奪サレシ旨ヲ昨夜行
在所ヨリ電報アリタルヨシ

有栖川征討將軍ハ大阪ヲ御出癸ニナル山縣陸
軍卿ハ二十三日福岡サシテ進癸サレ大山少輔
ハ二十五日東京ヲ癸シテ大坂ヘト出張故ニ留
主中ハ西郷中將代理ラシ第一局長ハ第四局長
ノ井田少將カ兼任サルト云
右大山君ヨリノ御同船ニハ綾小路侍從北條侍

魁 賊 鼎



舊正三位陸軍大將
西郷隆盛ノ像



舊正五位陸軍少將
篠原國幹ノ像



從海軍省ヨリハ町田大尉ヲ初ノ外七人陸軍省
ヨリハ畑中小尉外三人工部省ヨリ技手二人技
術三人其外四五人三井組ヨリ二人有栖川家ノ家
令中村氏モ乗込レシト
大阪鎮臺ヨリハ二大隊ト輜重隊ガ一大隊工兵
ガ一大隊下ノ関ハ既ニ繰出シニナリタリト又
品川碇泊ノ千代田艦ハ東京近海ヲ護送ナシ横
濱碇泊ノ富士艦モ同シク護衛ヲナスト云

鹿兒島追討記卷ノ三尾

魁 賊 鼎 居 圖 不 軌

舊正五位陸軍少將
篠原國幹ノ像



舊正三位陸軍大將
西郷隆盛ノ像



舊正五位陸軍少將
桐野利秋ノ像



西野古海軍大將



新原因特、新

書五五外對軍少將

鹿兒島追討記卷之四

報知社々説

西野古海編輯

鹿兒島人ノ反跡顯然タルニ因テ征討ノ命ヲ發
 セラレタルヨリ世人ハ唯叛徒ノ巨魁タル人物
 ヲ知ラザルヲ以テ或曰西野氏ハ叛徒ニ加入セ
 ズ或曰叛將ハ桐野篠原也下者説百端皆臆測ニ
 出ルモノ、如シ伶俐ナル日報社ノ如キモ尚ホ
 西野氏ノ賊徒中ニ在ラザルヲ明言シ反覆辯論
 西野氏ノ輕舉ニ出サルヲ鳴セリ我儕モ亦西野

氏ニ置クニ異常ノ信任ヲ以テセルガ故ニ西御
氏カ事ヲ奉テ國乱ヲ攪起スルヲ苟モセザルヲ
保證シタリキ

而ルニ今般正三位西御大將正五位相野少將正
五位篠原少將ノ位記ヲ褫奪スルノ布告ハ行在

所ヨリ達セラレタリ我輩ハ西御氏ノ輕動ヲ信
ゼサリシガ故ニ曩ニ同氏ノ奉勅ニ付テ喋々辯

駁セシモ豈圖ンヤ同氏ハ已ニ其位號ヲ褫ラ
ルニ至シトハ桐野篠原ノ徒ニ曩ニ既ニ兵ニ將

トシテ官兵ニ抗スルノ報アリテ各新聞紙上官
皆其ヲヲ載セサルハナシ獨西御氏ノ奉勅ハ衆

ノ知ント欲シテ知ルヲ能ハサル所ナリ何トナ
レハ同氏ハ兵ニ將トシテ東向シタルノ確報モ

ナク又其御里ニ居テ何事ヲ爲ノノ説モナク嚮
ニ暴徒ニ謝絶シテ逃匿シタルノ一報僅ニ我輩

耳底ニ存スルノミ然リ而メ今ヤ桐野篠原ト
共ニ同一ノ行為ニ出タルヲ証ス可ナリ而レテ

現ニ聞処ニ扱ハ西御氏ハ川尻ノ軍中ニ在ト知
ズシ西御氏ノ奉勅已ニ判然ニ歸レタルヲ良シ

ヤ同氏ヲレテ匪謀ノ魁首タラシムルモ決レテ

長...

=

憂ルニ足サルハ我輩ノ保スル所ナリ且何人ノ
 將タリ魁タルガ如キハ何ツ今日ニ問フニ要セ
 ン唯王師ノ速ニ戡定ノ功ヲ速ルヲ希望センハ
 今ヤ西御隆盛氏ノ舎弟ナル西御從道君ハ陸
 軍卿代理トシテ本府ニ在リ大義親ヲ嫉スルノ
 本文ニ基テ同氏が鞠躬尽力シテ指揮スルノ心
 情實ニ想フヘキ也
 我儕ノ聞ク所ニテハ熊本城ハ現ニ兵ノ拠ル
 所トナリ固守シテ動ズ賊軍ノ進路ヲ遮断シテ
 野津氏ノ引卒セル大軍ト夾撃スルノ手筈ナル
 ベレ而ルニ賊軍ハ兵ヲ分ツテニトナシ一ハ以
 テ城ヲ圍ミ一ハ以テ筑境ニ進ントスルモノハ
 如シ然ラハ則桐野ノ引率セル賊兵ハ現ニ熊本
 城ノ官兵ニ對シテ而シテ篠原ノ帥タル一隊ハ
 二十三日ヲ以テ福岡分營ノ官兵ト植木ノ近傍
 ニ戦シテ想見スベシ

然ルニ野津氏ノ大軍ハ本日ヲ以テ篠原ノ一隊
 ト會戦スベキトノ評説ヲ聞キ得タリ想フニ賊
 兵肥境ニ進入セルヨリ以来僅ニ開戦シタルノ
 事ニ未ダ大戦スルノ期ニ際セシテ官軍ハ

早タモ熊本ノ本城ニ批リ賊兵ヲ城下ニ引テ之
 ヲ疲ラシムルノ策ニ出テ賊兵ハ全軍大擧シテ
 東ニ向コト能ハス曠日弥久銳鋒稍折クルノ時
 ハ即チ野津氏ノ援軍ガ篠原ノ引率セル兵卒ト
 會戦スル時ナリ故ニ此一戦ハ大ニ西軍ノ利害
 ニ関スベキ官軍果シテ筑境ニ進入セントスル
 ノ賊兵ヲ敗リ破竹ノ勢ニ乗シテ肥後ニ入リ七ル
 ヲ追ヒ逃ルヲ逐テ賊軍ノ背後ニ至リ精練ノ兵
 卒ト銳利ノ軍器トヲ實用シテ戦鬪スルノ際城
 中ノ精兵ハ直ニ突戦シテ城下ノ賊兵ニ當リ福

岡分營ノ一隊ハ更ニ一面ヨリ進撃セハ所謂三
 面合衆ノ策ニシテ賊兵ハ遂ニ南向シテ肥境ヲ
 退カザルヲ得ザルニ至ル可シ是年、三手ノ官
 軍合セテ大擧レ進テ薩境ニ逼ルアラバ賊軍悉
 ヲ敗績スルハ鏡ニ掛テ見ガ如シ然レ氏此一戦
 ノ捷報ヲ聞サルノ際ハ未ダ枕ヲ高クシテ眠ル
 ヲ得ザルナリハ
 我儕之ヲ聞ク今般薩人ノ反跡顯レ征討ノ命下
 ルニ及ビ陸軍ノ士官兵卒ハ敵ハ西南ノ強兵ナ
 ル薩人ト聞キ勇氣日比ニ百倍シテ互ニ相競争

討薩ノ從軍ヲ購求シ只後ニテヲ恨ムト巡查
 モ亦競テ九州地方ニ行クニテヲ希望ス見ルベシ
 敵強ナリト聞テ奮勇セル日本魂ヲ呼乎敵ノ強
 キハ及テ兵士ノ勇氣ヲ一振スルノ刺激トナリ
 勇ヲ負テ起レルノ兵ハ為ニ挫折セラル、テハ
 ハ今古其例歟トセス今此精銳ニシテ義勇ニ富
 ル士卒ヲ引率セル野津氏ハ膽略ヲ以テ称セラ
 レタル名士ナリ安ゾ錦旗ヲ辱シムルト有ンヤ
 百ノ西御アルモ復憂ルニ足サルヘント
 二月廿四日征討總督有栖川宮御參内ノ上正午

十二時建春門ヨリ御出發(此節 聖上ニハ小御
 所マデ出御ニナリ御慰勞ノ勅語アリシヨシ外
 ニモ御暇ヲ賜ル御式ノアリシナルベケレド宮
 中ノ事ハ伺ヒ知ルベキニ非ス)御行列ハ警部六
 名谷口京都府以書記官ハ騎馬ニテ先驅シ騎馬
 半小隊ニテ御馬車ノ前後ヲ守衛ス總督官ハ御
 料ノ御馬車ニメサレ河村海軍太輔御同車ナリ
 其外七條停車場迄御見送ノ方々ハ木戸内閣頭
 間、伊藤參議、東久世侍從長、徳大寺宮内卿、河野幹
 事、柳原議官、中島議官、坊城式部頭、杉宮内以輔、林

總督宮
御出陣
之圖



徒等ニ縛セラレタルヨレ熊本ヨリ電報アリタ
リトテ各宗ヨリ出張レ居ル教師モ此頃ハ如何
シタルヤラント心配レテ居ルヨレナリ既ニ昨
年真宗東派ノ別院へ六七十名ノ暴徒押込坊主
ヲ残ラズ切断セルト誓リテ命惜クバ早ク此國
ヲ立去ベシト云又ハ旧恩ヲ忘レテ一向宗ヲ信
スル者ハ天誅ニ行ント云張札セレトナド右ト
イヘバ今度ノ如キ暴舉ニ際セハ如何ナル辛キ
目ニ遇ヒ居ルヤモ計リ難レト云説アリト
又云暴徒ノ壯士輩ハ兼テ心憎クヤ思ヒケン此

度軍事ノ血祭ニセントテ遠近ヨリ教法弘通ノ
タノ該縣ニ入込僧侶十三人ヲ切殺シ生臭坊
主ノ首ナレハ神前ニ供レテモ差支ナレト云
血祭團子ノ大サヨ打云テ一同ニ笑レヨレノ風
説アリト西海新聞ニ見タル由
鹿兒島製造所へ出張セラレタル佐々木權大録
ハ此程恙ナク帰京セラレタル由ナルガ賊徒ガ
彈藥掠奪ノ際最モ困難ヲ蒙リタルハ佐々木君
ナリト云是ハ彈藥ノ保護覺束ナキニヨリ彈藥
へ水ヲ注レタルハ佐々木君ノ發論ニ出タル故

ナリト云佐々木君ハ其後各所ニ潜伏シ賊兵ノ
 鹿兒島ヲ繰リ出スマテ諛地ニ居ラレタル由ナ
 ルカ賊徒ノ出張セシ兵數ハ中々大勢ニテ西郷
 桐野等ハ最後ノ一大隊ヲ引率ス殊ニ西郷ハ美
 美シク出發セシトナシ兵士ハ或袴ヲ着クルモ
 アリ或ハリン子ルノ股引ニ筒袖ヲ着シタルモ
 アリ又フランケツトヲ纏シモアリト云中ニハ鳥
 羽繪ニ似タルモ有シト云兵器ハ大砲(四斤半)十
 一門ニテ小銃ハ色々ノ種類ヲ取集メシ不ヘル
 ヲ携ヘシ者セ有シヨシ其進路ハ肥後天州豊

後ノ三方ニ分レテ行進スル由ヲ誌信セシト雖

モ蓋シ官兵ヲ分ツノ策略ニテ無本ヒ合集セシ

ト云

二月二十六日付ヲ以テ左ノ通達セラレタル由

官院省候東京府

陸軍大將正三位西御隆威陸軍少將正五位桐

野利秋陸軍少將正五位藤原國幹官位據奪被

仰出ル旨行在所ヨリ電報有之候條此旨

為心得相達候事

明治十年二月廿六日 右大臣岩倉具視

官院省使東京府

臨時海軍事務所ヲ神戸へ置キ征討ノ事務取扱致候旨行在所ヨリ電報有之候條此旨為心得相達候事

明治十年二月廿六日 右大臣岩倉具視

二十六日午後七時廿分癸ノ電報曰本日島津父子

子へ勅使トシテ柳原君ヲ差遣サレ花房隨行

且ツ龍驤清輝ノ二艦并ニ陸軍ノ兵三大隊巡查

五百人ヲ鹿兒島へ遣ス又製造所等ノ処分儀

有ニ付テ山田少將伊東少將仁禮大佐ヲ差遣

ヲ癸セシ電報ニ曰同日午後一時十分南ノ開本

京町三十一丁目余リ出張ノ熊本縣官ノ電報ヲ報知

セラレタリ曰ク毎日ノ戦ヒ城中堅固ニレテ勝

利ナリ植木^{熊本}二里^{京町}二丁目^余ヨリタハルノ戦ヒ

官軍餘程苦戦^レ南ノ関ヲ引揚ケ賊ノ方ヒ死傷

多ク疲勞甚シ^レ昨朝山鹿ノ官兵ハ二三里亦下進

撃シタレドモ戦ナレ昨夜野津三好少將モ到着

ニナリ追々兵卒モ繰込タレハ明日ニモ城中ノ兵

ハ謀ジ合テ打破^ト官軍ノ勢大ニ振ヘリト南

官船肥後國
小島洋
取ノ圖



鹿兒島追討記卷ノ四 尾

ノ関ヨリ高瀬マデハ行程凡ソ六里ニテ途中山
坂^キ搔^クラ多ク賊兵ガ官軍ヲ拒^クニハ屈^ク竟^クノ要地ナ
ル由ナルガ賊ハ更ニ據^ク守^ルセサリシニヨリ野津
少将ハ平押^シニ高瀬マテ進行セラレタルト見タ
リ且ソノ戦争ハ野少将率^ヒラレタル歩兵ニ大
隊砲兵一六隊ニテ自ラ軍配ヲ取^リレタルナラン
ト云リ



官船肥後國
 小島洋行
 茂船ヲ率
 取ノ圖

鹿兒島追討記卷ノ四尾

ト云リ
 隊砲兵一六隊ニテ自ラ軍配ヲ取レタルナラン
 リ且ツノ戦争ハ野必將率ヒラレタル歩兵ニ大



鹿兒島追討記
 西野古海編輯
 小島洋
 西野古海

鹿兒島追討記卷之五

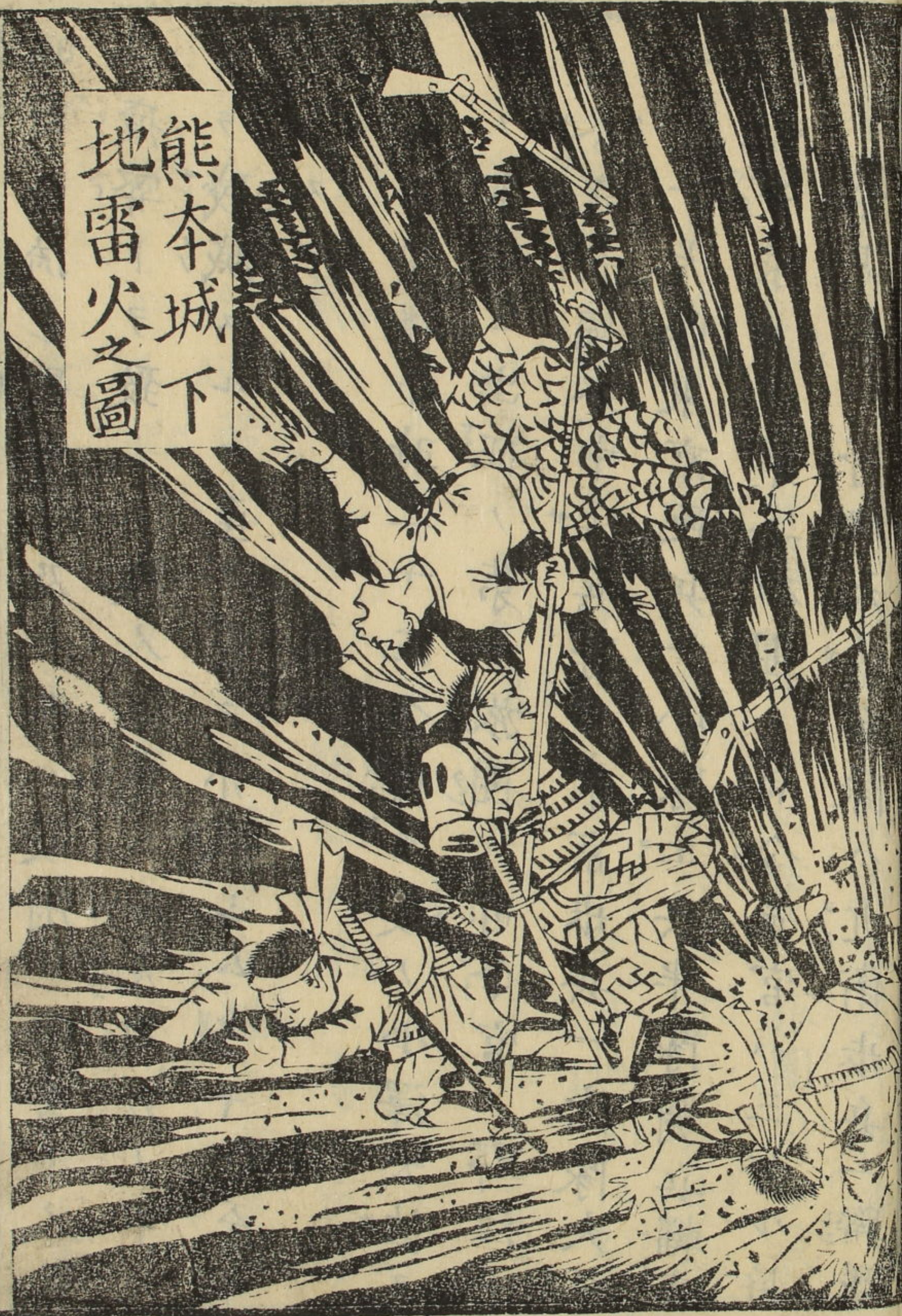
西野古海編輯

朝野新聞論説曰維新以來茲二十年十リ暴徒ノ草
 澤ノ間ニ嘯集シ兇器ヲ以テ王師ニ抵抗セルモ
 ノハ曰ク佐賀曰リ熊本曰リ萩曰リ鹿兒島ト覆
 轍前ニ有ルモ後車之ニ次ギ已ニ數回ノ多キニ
 上レリ天下無事ニシテ人民方サニ泰平ヲ歌謠
 スルノ時ニ當リ兵馬馳騁ノ餘習ヲ忘ル、能ハ
 ス脾肉ヲ撫デ、慷慨シ憤々不平ノ心ハ潰裂シ
 テ一道ノ殺氣ト為リ遂ニ一世ヲ驚動メ鮮血ヲ

卷之五



熊本城下
地雷火之圖



曠野ニ流シ影響ノ及ブ所ハ政府ノ勞苦ト人民
疲弊トヲ致シテ叛人亦竟ニ砲丸刀刃ノ下ニ
自ラ殘滅スルニ至ル豈ニ亦哀シムベキノ至リ
ナラスヤ

廿六日午後十時二十五分博多發ノ小澤大佐ヨ
リノ電報ニ出征ノ第一旅團ノ司令官ハ野津少
將參謀長岡本中佐兵隊ハ東京歩兵一大隊大坂
歩兵一大隊東京砲兵一小隊工兵半隊騎兵輜重
兵若干隊ナリ第二旅團ノ司令長官ハ三好少將
ニ參謀長ハ野津大佐兵隊ハ近衛歩兵一聯隊

東京砲兵一小隊工兵半隊騎兵輜重若干隊本日
南ノ關へ到着未タ戦争ナシ又第三旅團司令長
官ハ三浦少將兵隊ハ近衛歩兵一大隊大坂歩兵
二大隊砲兵輜重兵若干隊ヲ率井今日博多へ到
着歩兵ハ明日當地へ到着ノ筈ナリトシテ用意
セリトノ報アリト
又云前ニ載ルトコロノ龍驤艦ノ為ニ奪ヒ取ラ
レタル賊船迎陽丸トテ賊ノ彈藥兵糧十トヲ運
送シ居タルヲ肥前天草ノ東十ル日奈久ノ沖合
ニテ難ナリ奪ヒ取リタル由右ノ如ク此船ハ兵

擲彈藥ヲ運送シテ賊ノ為ニハ大切ナル船トレ
 バ其勢ヲ殺ギシテ萬兵ヲ斃セシヨリ遙ニ勝レ
 タル手柄ト云フ一海軍ニテ速補セシ鹿兒島
 丸野母丸ノ二艘ニテ野母丸ハ前ニ燃ノ外舞鶴
 拂舞鶴丸ハ機關ヲ破壊セシ趣十リコトヲ計
 又云佐賀ニテモ少々ハ賊徒ニ應ゼンコトヲ計
 ル者アリシニヤ巨魁二三名捕縛セラレタルヨ
 シ今日ニ至ル迄何等ノ異状ナキハ巨魁ガ縛セ
 ラレタル故ナラント鹿兒島縣ノ士族貴嶋卯太
 郎并ニ同縣山崎精吾ノ二人ハ天晴ナル剛武者
 ナリト呼バレタモノナルガ兼々學校黨ノ舉動

ヲ怪シ三一朝事アラン時ハ朝庭ノ為ニ西郷桐
 野篠原ノ首ヲ打落サント同志ノ者五十余人申
 合セテ待掛シガ終ニ其事暴露シテ辛キ目ニ
 逢タル由ナレバ多分賊徒ノ為ニ殺害サレシナ
 ラント云ヘリ一説ニハ貴島卯太郎ハ殺害ヲ免
 説アリ尤モ賊徒ニハ三條ノ規則アル由ニテ第
 一ニハ官府ノ物ニ手ヲ附ルル勿レ第二ニ官員
 ヲ殺ヌ勿レ第三ニ人民ニ難儀ヲ掛ルル勿レ
 トノ事ニテ菅野覺兵衛氏ガ無難ニ歸タルモ又
 縣官ノ害ニ逢ハザルモ右等ノ次第ニ依テ免レ

タルナラン只此舉ニ斃サレシハ前ノ貴嶋卯太郎ナラントノ説アリ又賊徒ハ無闇ニ租稅ヲ緩シテ遣ルナド、言ヒ觸ス由ナルガ是ハ何時モ奸賊ノ極リ文句ニテ憎ムベキモ亦可笑シケレ亦政府ノ軍艦ハ大抵神戸ヲ舉テ長崎或ハ鹿兒島ヘ向ヒシ趣ナルガ薩ノ本國ヲ衝クニハ城下ニ向ノ時ハ櫻島ノ要害アリ第一歸ノ附圖ヲ已ニ英船モ因却セシ程ノコトナレバ鹿兒島ヲ數里ノ小港ヨリ攻撃ニ及ブナラントノ説アリト旧會津藩ノ士族ガ討薩ニ奮發スルハ外ノ新

聞ニモ見エタルガ賀越能三國ノ士族モ十五才以上四十才以下舉ツテ薩州ノ天下ヲ亂ル者ヲ討ント大奮發シテ政府ニ出願セシ趣ナリト廿六日熊本縣ヨリノ電報ナリト曰日々ノ戦争城中ノ官兵堅固ニシテ毎々利アリ植木タバルノ戦ハ官兵頗奮戦シテ一ト先南ノ方ニ引揚山鹿ノ官兵ト合シテ二三里許進軍スレ氏戦鬪ナシ昨夜野津三好ノ兩軍モ着シタレハ城内ノ官兵ト通ジ合セ大舉スル手筈ニテ勢ヒ甚ダ盛隆ナリト又云綿貫少警視其外巡查七百名程熊本ヘ

繰リ込^コ三^カ等大^ク警部^ウ川路^チ利行^リ池端^チ清秀^シ赤羽^セ友春^ユ
 漆川^シ濟林^ジ誠^シ一小^コ笠原^カ尚^シ彌^ミノ諸^シ君^ク共^ニ城^シ中^ニ入^ル
 銳^キ氣^キヲ養^ヒ七^ツ鎮^シ臺^シ兵^ト合^シテ進^シ擊^ススル手^ヲ配^シナル
 ト云^フ廿^ニ六^ニ日^ハ兼^テ前^ノ号^ニモ記^シタル如^ク野^ノ津^ニ
 山^ノ將^モソノ前^ニ南^ノ關^ヘ着^キ陣^セラレ定^テ城^中
 兵^ト牒^シ合^セ大^ニ戰^{アル}ベキ時^{ナリ}ト頭^ヲ延^ク
 テ其^ノ報^ヲ待^シカ果^シテ當^日ハ官^軍未^ダ明^{ヨリ}高^瀬
 瀨^口へ進^シ擊^シ午前^九時^{ヨリ}戰^ヒ始^マリシガ烏^合
 合^ノ叛^兵怎^デカ堂^々タル王^師ニ敵^セン終^ニ散^ル
 々ニ打^チサレ銃^器彈^藥ヲ打^捨テ手^負死^人ハ顧^ル

ルニ暇^アラス崩^レ立^テ敗^走スルヲ官^軍ハ息^ヲ
 モクレズ木^ノ葉^驛マテ追^殺シテ午後^一時^頃軍^ヲ
 ヲ收^メタリト又^熊本^ノ城^中ニテ八^日々ニ賊^ノ攻^セ
 メ来^ルヲ少^モ屈^ヒズ逆^戦ヒ地雷^ニテ賊^徒ヲ五^十
 十^八ホド斃^セリト廿^六日^午後^八時^五十分^南ノ
 關^發ノ電^報ニ據^テ記^スト賊^將西^郷隆^盛ハ數^万
 ノ兵^ヲ率^テ川^尻マテ押^出セシト云^隆盛^此日^ノ
 打^扮ハ黒^羅紗^ノ戎^服ヲ着^シ腰^ニバシドヲレメ
 渾^テ兵^士ヨリ司^令官^ニ至^ルマテ刀^ヲ帶^バガル
 者^ナシト又^云渾^テ賊^軍ノ打^扮ハ白^莫大^小白^キ

脚半ヲ用ニシカバ 暗夜ト雖モ紛ル、ヲナシト
 前ニモ記載セシ如ク 総督宮ハ西海ノ浪ニ龍驤
 清輝ノ二艦ヲ牽テ 錨ヲ神戸ニ揚ゲ玉ヒ 熊木城
 下ニハ大兵將ニ 雪霜ヲ踏デ着到セラレシナル
 ベシ 巳ニ聞ク 塚野津陸軍少將ハ 第一旅團ノ司
 令長官トシテ 岡本中佐 參謀長トナリ 三好陸軍
 少將ハ 第二旅團ノ司令長官トシテ 野津大佐 參
 謀長トナラレタリ 隨行ノ兵隊ニハ 東京鎮臺第
 一聯隊 第三大隊 大坂第八聯隊 第二大隊 東京鎮
 臺豫備砲兵 第一大隊 第一中隊 同輜重兵 第一小

隊 傳令騎兵 半分隊 近衛步兵 第一聯隊 東京鎮臺
 豫備砲兵 第一大隊 第二小隊 同輜重兵 第二小隊
 傳令騎兵 半分隊 ナリ 又 熊本城下ニ 固守スル兵
 ハ 步兵 第十三聯隊 砲兵 第六大隊 二小隊 工兵 一
 小隊 半ニシテ 谷陸軍少將ハ 司令長官タリ 樺山
 中佐ハ 參謀長タリ 兎玉少佐ハ 參謀タリ 兵員凡
 ソ 三千餘人 加フルニ 綿貫少警視ノ 引率サレタ
 ル 警部 巡查 七百 人アリ 大砲 八十二門ハ 要衝ノ
 地ニ 分配シ 糧米 鹽 噌モ 十分モ 充實センメ 四方
 合期シテ 一時ニ 賊軍ヲ 掃攘セラレント云 又 廿

六日ノ午前九時高瀬川向ノ戦ニハ官軍大勝
利又廿七日ノ早天賊兵官軍ヲ襲撃セシモ忽掃
攘サレシト云又賊ハ一舉ニ熊本ノ城下ニ迫リ
大小砲ヲ連發シ短兵急ニ攻立城壁近ク進ミレ
折カラ一聲ノ霹靂大地ヲ劈ドウト發スル地雷
火ニ賊兵凡四五十人矢庭ニ命ヲ落セルトナン
今度叛將西郷氏ノ最初ノ目的ニ外レタルヲ三
ツ有ト一ニ曰川村海軍大輔鹿兒島ニ入忽其機
ヲ見テ尾ノ道ヨリ電報ヲ以テ手早ク軍艦ノ用
意ヲナシ鹿兒島港ヲ封ジ船ニテ兵隊ヲ送ル、

ヲ得ガラシメタルナリト第二ニ曰西郷一ダビ
手ヲ舉レバ天下ハ響應スル如リニ思ヒシ震按
外ニ響應ノ賊ナシト第三ニ曰鎮臺兵ハ素ヨリ
土民ノ兵士ナレバ一蹶ニ蹶キラサント思惟シ
タルニ熊本ハ堅固ニシテ落城セスト以上是ラ
ノ三件ナリト又暴徒ノ國境ヨリ繰出シタル
兵數ハ凡一万四千ニテ二百人ヲハ一小隊ト
ナシタルト此内隊長トモナルベキ人物ハ西郷
小平永山矢一郎別府新助同九郎邊見十郎太永
山九成淺井直之進松永清之丞高城十二河野四

郎村田三介市本勘介山内半左衛門弟子丸應助
 野村十郎太中島武彦肥後助右衛門兒玉八之丞
 伊東直治山口小右衛門平山新介等十リト又本
 陣ニハ西郷隆盛桐野利秋篠原國幹村田新八
 邊商照池上四郎ノ面々前ノ一万四千ノ外六
 百人ホド鹿兒嶋ニ残りテ國ヲ固メ居ルナラン
 トノ説アリト廿七日高瀬口ニテ賊ヲ襲撃シ最
 早掃攘シタレドモ何分手廣ノ場所ナルヲ以テ
 出兵ヲ乞ヒ来リ依テ長崎ノ兵モ繰リ出シタリ
 ト三好少將ハイマダ進撃ニハ及バサリシガイ

ト又山鹿口ニ於テ賊兵ハ兵糧ヲ船ニ積込
 兩岸ヲ護衛シテ菊地川ヲ下リタルトコ口官
 一打立テラレテ敗走シ三名捕縛ニ就キタルヨ
 未ダ何日ナルヲ詳ニセス三浦少將ハ近衛兵
 一大隊鎮臺兵二大隊ヲ率井テ高瀬口ヘ到着セ
 ラレタルヘシト云總督ハ三大隊三浦少將三大
 隊大山直平ニ三大隊ヲ引テ出發九州ノ兵ハ都
 合十七大隊半ト三砲座ニテ兵隊ハ充分ニ揃ヒ
 タリト

高瀬川ノ両堤ヲ以テ官賊ノ両兵相對シ相戦フ
= 賊兵ハ常ニ小銃ヲ以戦ヲ試シ官兵ハ大砲ヲ
用ヒテ其兵ヲ撃破スルガ故ニ勝利ハ常ニ官軍
ノ方ニアリト云然レトモ賊兵モ堅固ニ防守ス
ルヲ以テ未ダ進攘スル能ハズ尤モ近日ニハ撃
破スルニ至ルベシト近頃ニ到リテ賊兵ノ熊本
ニ在ルモノ其數減ゼシ趣キナリト云フ蓋シ賊
兵ハ熊本城堅固ニシテ投リ能ハサルヲ察シ其
他ノ方向ニ進ミシラントモイヒ又タ一説ニ
官兵高瀬山鹿ノ両口ヨリ進撃スルノ急ナレバ

其両口防ガシメシナラントモ云フト
カハシメシナラントモ云フト
政府ニテハ西郷桐野篠原ノ反跡明白ナルハ太
平丸ノ報知ニテ早リ分リタレドモ熊本ノ官兵
ハ賊兵六名ヲ捕縛ヒシ後千始ノテ之ヲ知リタ
リト云フト
又云西郷氏ノ旗印ハ「新政厚德」四字ヲ書シ頻
ニ人氣ヲ誘惑スト云
今度ノ變動ニ就テ大藏省ヨリ海陸軍ノ為ニ出
シタル金高ハ已ニ二百万ニ過ルヨシ又タ鹿兒

島ノ賊徒ハ出張前ニ縣廳ノ金三十万圓ヲ掠奪
 セシニ過ギザルヨシトレバ以シキニ及ンデハ
 掠奪ノ外詮方ナカルベシトノ評判ナリト
 去月廿六日ニ東京ヲ發シタル第二聯隊ノ第三
 大隊第二聯隊ノ第三大隊ハ神戸へ向ケテ出張
 ノ命ナリシカド模様變リタルト見ヘ直チニ九
 州路へ向ヒシト云岡山ノ杉山岩三郎ハ兼テヨ
 リ西郷ヲ推戴シ同縣士族ノ人望ヲ得ル者ナル
 ガ石井權中警視ガ同所ニ出張ノ後ハ折々大久
 保内務卿ニ見込書杯ヲ呈シ却テ政府ノ為ニ盡
 スノ景況ナリト云フ

廿七日午前賊ハ羽サマ川ノ向フニ圍リ川上ヨ
 リ横合ニ出テ打戦フ官軍新手ノ勢ヲ入カヘ進
 撃シケレハ叶ハスシテ山ニ據ル故ニ官軍凱歌ヲ
 揚テ船橋村ヲ引上シト又云同日午前六時頃賊
 兵稲田村ノ渡シ場ノ番兵ヘキビシク砲發ナシ
 ケレバ官軍奮テ大砲ヲ向ケ三十發ホド打立シ
 カバ賊兵直ニ三十余人之ガ為ニ斃ルト云
 三月一日午後八時ノ電報ニ曰ク去ル廿七日午
 前七時高瀬口ノ賊徒襲来リ諸口ノ哨所ニテ戦

肥後大路戦



舊陸軍大將
西郷隆盛隊

鹿兒島追討記卷之五終

端ヲ開キ午後ニ至リ本軍ト狹間川ノ東ニ當リ
 新夕ニ一戦端ヲ開キタリ此外諸口トモ激戦第
 五時ニ至リ全ク賊ヲ敗リ諸口ヘ防禦ノ兵ヲ配
 置ス此夜異條ナシ此日ノ賊ハ昨日ノ大敗ヲ償
 ハントテ山鹿口ノ兵ヲ轉ジ来ルナリト



鹿兒島追討記卷之五終

ハントテ山鹿口ノ兵ヲ轉ジ来ルナリト



鹿兒島追討記卷之六

朝野新聞論說

西野古海編輯

夫レ兇徒が政府ニ抵抗スル所以ノ口實ヲ聞リ
 或ハ征韓ヲ主張シ或ハ神威ノ衰微ヲ慨歎シ
 或ハ關下ニ諫争スルト唱へ或ハ政府ニ詰問ス
 ル所アリト稱シ其ノ揚言スル所口ハ各々異
 同アリト雖氏概シテ之ヲ論スレバ其ノ功名ヲ
 負恃シ陰カニ覬覦ノ心ヲ懷キ政府ヲ顛覆シテ
 自ラ其ノ威權ヲ掌握セント欲スル者起テ之ヲ

卷之六



唱へ而ノ少年客氣ノ功ヲ貪ボリ事ヲ好ム者從
 テ之ニ應ジ僅カニ一時ニ跋扈強梁スルニ過ギ
 サルナリ然レモ若シ兇徒ヲシテ西海中國ニ蟠
 結シテ互ニ連衡合從シ一時ニ紛起スルが如キ
 了アラシムレハ或ハ兇焰ノ四方ニ散濺シ遂ニ
 天下ノ大事ニ至ルベキモ未ダ知ルベカラザル
 ナリ然ルニ賊徒ハ陰ニ其ノ聲息ヲ通スルト雖
 氏常ニ其ノ蜂起ノ機會ヲ失ヒ零々落々トノ前
 後ニ錯出スルニヨリ自ラ孤立ノ勢ト為リ一敗
 又地ニ塗レ坐チガテ後起者ノ勢力ヲ失ヒ觀望

者ヲメ其ノ心ヲ杜絶フルニ至ラシム佐賀熊本
 萩ノ暴動ノ如キ即チ是レ也
 去ル廿八日ノ戦ヒニ生捕リタル賊徒ノ中ニ熊
 本ノ脱走士族アリテ其者ノ白状ヨリ賊徒ノ軍
 略并ニ陣中ノ模様十トモ委シク分リタル由ニ
 テ賊徒ノ方ニ八大砲ハ野戰砲が僅カニ十二門
 ホド有ルノミナリト云フ最モ先月廿六日午後
 ノ電報ニ熊本ニテ賊神風連ノ懲役ニ成リ居シ
 者ヲ赦シテ案内ニ充ツ縣下ノ士族モ中立ヲ唱
 へテ動かザルモノ多シ其中少々賊ニ應ジタル

者モアリ百姓ハ賊ヲ喜ビテ助ケルノ勢アリト
ノ報アリタルヨシ是ニテ思ヒ合スレバ脱走士
族ト云ヘルハ此神風連ナラント思ハルト
賊徒ガ鹿兒島ヲ押出セシ後ニ跡コリ馳セカラ
ントセシ者ドモガ大将分ノ者ニ銃器彈藥ヲ渡
シ呉レヨト請ヒタルニ豫備ノ銃ハ先陣ノ者ノ
為メナレバワイ共ノ如キ後レタル武者ニ渡ス
ハ相成ラズ戦争ガシタクハ熊本マテ手ブラ
テ行ケ同地ニハ銃器モ彈藥モ有ルテ思ヒ思ヒニ
分捕功名スベシトテ受引ハレバ此連中ハ手ヲ

フリナカラ後陣へ引付添フタリト云
黒田參議川路大警視安田開拓權大書記官モ
勅使柳原左衛門尉鹿兒島へ赴カレタル由昨日
ノ電報中ニ下官ト有ルハ川路公ナラント
今日出帆ノ廣嶋丸ハ砲兵本廠ヨリ積ミ込ミシ
スナドトルハ彈藥ハ二百七十四万發ニテ乘リ
組ミハ軍人上等二百名下等八百名ナリト云
ト
大隈大藏卿ハ近々西京へ行ルハ本ノ風説アリ
ト云リ

是迄高瀬口ニテ戦タル官軍ハ何レモ先鋒兵ニ
 テ野津三好ノ両少将ハ南ノ關ノ本營ニ陣ヲ据
 エ未ダ戰場ヘハ望マレザリシ由ナルガ三浦少
 将モ已ニ到着セラレタルニ付キ三少将共一昨
 日頃戦地ニ出張セラレ日ナラズ鋭ヲ盡シテ進
 撃ニ及ブベシト云フ事本
 高瀬口ニテハ數度ノ戦争アリト雖モ川ヲ隔テ
 ハリ對戦ナレバ未ダ大勝敗ヲ決スルニ至ラザ
 ルナラシト云フ事
 方今軍艦ヲ各所ニ配賦セラレタルハ長崎ヨリ

長官乗組ミ馬關ニ来リソレヨリ鹿兒島ニ至ル
 者ハ春日艦ニシテ馬關ヨリ鹿兒島ニ赴クハ高
 雄丸ナリ長崎ニ在ルハ鳳翔艦清輝艦ニテ長崎
 肥後ノ間ヲ巡視スルハ龍驤艦ナリ馬關ニアル
 ハ浅間艦筑波艦孟春艦日進艦第二丁卯艦ニテ
 兼テ豊後海ヲ警邏シ神戶ニ在ルハ東艦快風丸
 ニテ其他乾行艦蒼龍丸沖鷹丸攝津艦千代田艦
 千里号迅鯨号富士山艦肇敏丸ハ横濱横須賀品
 川邊ニ浮ビ第一利根丸ハ海軍省内ニ備ヘ置ル
 趣ナリト

曩ニ暴徒カ瀧ノ上ヨリ彈藥ヲ奪ヒ取りシ時途中ニテ蠟燭ノ真ヲ取ラントセシニ其火誤リテ彈藥ニ移リ即死セシモノ多分アリシヨシ又彈藥掠奪ノ際ニハ真ノ盜賊アリテ暴徒ト共ニ製造所へ押込ニ地金針金麻炭等ヲ恣ニ盜ニ出セシニ暴徒ハ之ヲ見認テ忽ニ取押へ痛ク懲シテ其物品ヲ盡ク官ニ返シタルヨシ賊徒ナガラモ是等ノ所業ハ中々味ヒアル事ナリト出張ノ役人達モ感心セラレタルヨシニテ是ハ該縣ヨリ歸京ノ人ノ話シナリト云フ

戰地ヨリノ電報ニ曰是迄數日ノ戰ハ廿六日廿七日ノ兩日尤劇シク二十六日ノ戰鬪ハ高瀨口官軍大勝利然シ三好少將少シク手疵ヲ受ケラレシト云廿七日ハ初メハ十分ナラザリシガ後ニハ大ニ勝利ナリト官軍ノ死傷廿六人賊徒ノ死斃九十二人アリト云賊將村田新八ノ戰死ハ定テ此時ナラント又云高瀨口ニテ賊ノ臺場ヲ乘取大炮二門分捕シテ益進撃ノ報アリシト又高瀨口勝利木ノ葉ヲトリ猶タバル坂ヲ進撃ス山鹿口ハ烈戰今ニ

止ズト云

熊本鎮臺ニテハ城外ニ地雷火ヲ設シユト兩度

ニシテ一發コトニ暴賊四五十人ヲ打斃セント

當城ハ兵糧彈藥充分ノ貯ヘアリテ其後ハ小セ

リ合ノミ只城ニ近ヅカ賊兵ヲ射撃スルヲ樂ニ

スルト云

是ヨリ先西郷隆盛桐野利秋篠原國幹ノ連署ニ

テ熊本鎮臺ヘ掛合タル書面ノ趣ハ今般關下ニ

奏問ノ義之レ有ニ因テ上京ス其鎮臺管下通行

致スベキニ付臺兵整列シ禮式ヲ以テ取り行フニ

シトノ事ナリト云

賊徒ハ近來刀ヲ揮テ進撃スルノ風説アリト蓋

シ彈藥ニ缺乏スル故ナラシト云最モ鹿兒島出

發ノ際ニ備ヘタル彈藥ハ一人前二千發ニ過ギ

サルヨシ併本國ニテハ製造ニ容易ナリト雖氏

海路ノ運漕叶ハズシテ陸地六十余里ノ路程ヲ

運搬スルナレバ其困却推テ知ルベシト

又云賊兵ハ戰爭毎ニ敗北シ熊本海岸ヨリ賊ノ

陣營ヲ燒キ拂ヒ且賊兵ヲ追崩スト又云賊徒掠

奪ノ金モ拂底ニ至リヤ近頃ハ人夫ノ賃ヲ拂ハ

六

又ト尤死人手負人送附ノ者ハ給與スルヨシ賊
 ノ病院ハ川尻ニ有ト云
 或説ニ曰鹿丸島ノ暴徒ハ素ヨリ銃器彈藥ヲ始
 メ糧食費用ニ至ル迄一モ備具セルモノナシト
 就中金錢ノ如キハ七万圓ニ過ギズト原來該縣
 ハ管内ノ租税ノニテハ士族ノ家禄ニ充ル能
 ス年々大藏省ヨリ二十万圓ヲ該縣ニ回サレ
 タルガ今年ハ何故ナルカ士族ノ家禄渡シヲ取
 急ギ横山一等屬が出京ノ上定メノ如リ大藏省
 ヨリ請取濟ニナリ神戸マテ携ヘ歸レリ又同縣

ノ喜入某ハ大坂ニ来リ種々金策ノ上六万圓余
 ノ金員ヲ得横山一等屬ト共ニ三國丸ニテ歸國
 ノ手筈ナリシヲ政府ハ早クモ之ヲ知リ三國丸
 ノ出帆ヲ止メ右兩人ハ拘留トナリ金員ハ悉皆
 御取上ニテ此企ニ關涉セシ者ハ神戸大坂ニ於
 テ拘留セラレタリト
 二月廿八日午後高瀬口ノ戦ハ尤モ劇シリ官軍
 モ必死ノ勇ヲ奮ヒ頻ニ進ニテ戦ヒシガ其勢焔
 ヤ強カリケニ此手ニ寄タル賊將ノ篠原國幹ハ
 手疵ヲ受ケテ引上シガ四時過ル頃又一手ノ賊

軍此處ニ寄セ来リテ屢戰爭シタリシト又聞熊本
 城中ノ兵士ハ賊ノ圍ミヲ突キテ八方へ打散シ
 米千俵ヲ奪ヒ取テヤス城ニ取入レタル此
 戰爭ニ賊將村田新八重手ヲ或ハヲ負ヒシト故
 ニ官兵仕合ヨシトテ勢ヲマトメテ再城ニ籠ラレ
 タリトゾ

三月三日出帆ノ廣島丸へ砲兵本廠ヨリ積込シ
 スナイドルノ彈藥ハ二百七十四万發ニテ乗込
 シ軍士ハ上等二百下等八九百人ナリト云
 今度召集セラレタル處ノ第二後備兵ハ東京鎮

臺二大隊名古屋鎮臺二大隊大坂鎮臺二大隊ニ
 テ都合六大隊ナリト云

是迄西郷桐野ノ両氏ノ元へ東京ノ景況カ一切
 手ニ取ル如ク聞込タルハ如何ニセ不審ニ思ヒ
 シニ今日ニ至リテ思ヒ合スルコソアレ過日
 赤羽根邊ニ住ム鹿兒島縣ノ士族何某カ父子共
 ニ拘引サレシ此人ヤ是迄常ニ國元へ電信ヲ通
 ズルニ毎度八九言ノ長文章ニシテ剩へ暗号ヲ
 用ヒ一信ノ費十五圓位ナルヲ屢出シタル人ナ
 リト惟フニ是等ノ人ノ所為ナルベシト

熊本ノ士族ハ餘程賊徒ニ應ジタルヨシナレド
 モ給與スベキ器械ナリ地理ノ案内モ輜重兵ノ
 周旋ニ盡カスルニハ及バザルトノ風説トリト
 又云賊ノ彈藥ハ數十里ノ路程ヲ經テ運送スル
 事ナレバ頗ル缺乏ニ苦シムト雖モ兵糧ニハ左
 ノミ困却セザルト己ニ先日近村ノ水車ニテ米
 ヲ搗キタルヲ見テ是ハ何ノ用ニ供スルヤト尋
 ルニ鎮臺ノ御用米ナリト答ヘタルハ相當ノ價
 ヲ以テ買上タルヨシナリト
 鹿兒島縣ノ賊徒等ガ宿所々々ノ標札ハ鹿兒島

藩新政黨大総督正三位陸軍大将西郷隆盛新政
 大總督征討大元本陣或ハ大佐某少佐某十ト、
 帥西郷吉之助
 銘々立派ニ建置ヨシ新政黨大總督ノ稱号ハ自
 分ノ僭号ナルベケレド朝廷ヨリ叙任ノ正三位
 陸軍大将ノ官位ハ既ニ剝奪サレタルニト
 三月四日午後南ノ関發ノ電報ニ曰昨日午前六
 時ヨリ大進撃雙方其激戰官軍尤勝利ニシテ終
 ニ田原山ノ上マテ追進ス然レモ死傷ハ少シト
 此所ヨリ熊本マデハ最早三里ノ余ナリシニ依
 テ不日ニ熊本ト交通ノ道開クヘントノ報知ア

リト
 熊本鎮臺ニテハ初メヨリ籠城ノ軍略ニテ城ノ
 近傍ニ人家アリテハ障礙ナルヲ以テ止ヲ得ス
 焼拂フニツキ早クニ立退ベキ由ヲ市街へ布達
 ヒラレケレバ沸然トシテ騒ギタチ家財運輸ノ
 為ニ人力車ヲ備フニ道ノ遠近ヲ問ハズニ圓五
 六十錢ナレハ貧民ニ至テハ力足ラス殆困難ノ
 様子ヲ察シ巡査ハ貧民ノ立退兼ル者ニハ盡ク
 車賃ヲ與ヘ立退セテドスルウチニ最早十二時
 ニモ成リケレバ三十分ヲ延シ悉ク東西ニ退キ

拂ヒシヲ考ヘ城内ノ櫓ヲ焼拂ヒ一ヶ所ヲ殘シ
 又安政橋ニテ三十軒バカリト坪井邊六十軒ホ
 ド焼タリト其後戦争ノ有ル毎ニ諸方ハ焼キタ
 レ氏熊本市中ノ立退キノ騒ギハ實ニ筆ニモ盡
 サレズトナン
 東京鎮臺ノ第二後軍ハ先年支那ト葛藤トノ際
 徵募サレタル者ナルガ今度徵募ノ令出ルト等
 シリ競テ其募ニ應ジタリ孰レモ體格極テ強壯
 ナリト云
 鹿兒島縣下ノ驛々ニハ青竹ニテ矢来ヲ作り且

大ナル標柱ヲ建テ前掲ノ如ク鹿兒島藩新政
大元帥云々ト大書シテアルトノ風聞

引用書目

東朝野新聞 假名書新聞 繪入新聞

東京日々新聞 郵便報知新聞 續賣新聞

曙新聞 大坂新聞

○每号事實ヲ按萃スルニ逐次原書ヲ記載

スルニ逞アラス論說モ亦然故茲掲謝ス

鹿兒島追討記卷之六終

鹿兒島追討記卷之七

西野古海編輯

曙新聞海陸軍ノ諸君ニ呈白スル言ニ曰嗚呼諸
君ノ鞠躬尽瘁モ亦タ至矣一タヒ妖氛ノ西海ヲ
捲キ全國ノ安寧ヲ攪亂セシヨリ當路ノ諸君ハ
盡リ安居寧處スルニ暇アラスト雖氏就中海陸
軍ノ諸君ハ親ク兵事ニ鞅掌シ日トシテ暇給ナ
キニ至レリ我輩安ンソ其ノ國事ニ勤勞スルノ
厚ク其ノ職分ヲ盡スノ至レルヲ感喜セサラン
ヤ

西郷の寓所
政府の標れと
出づる人々



鹿兒島藩新政府
大總督正三位陸軍
大將西郷隆盛本陣

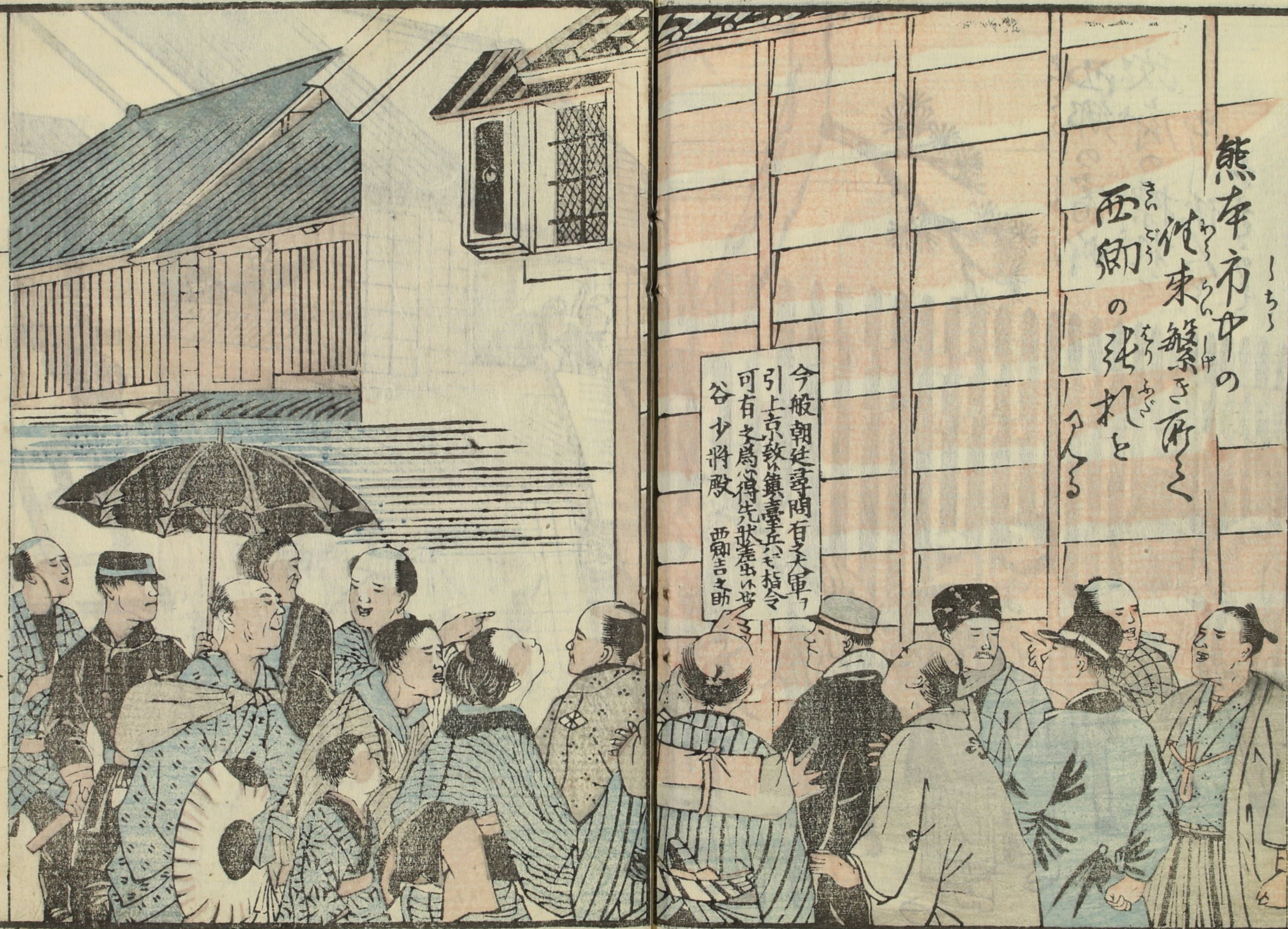


熊本市中の

往來繁き所と

西郷の張札と

今般朝廷尋問有る軍
引上京致鎮臺兵も指令
可有之為得先狀差出は皆
谷少將殿 西郷吉之助



二月十九日
熊本之
城下
焼辨の
市中の
人民
立退
のふ



卷之七

四



卷之七

熊本縣下
高橋之戦争
野津大佐
隊旗と
奪ひ返す圖



五

七

海軍ハ未ダ交戦ヲ實地ニ試ムルニ至ラスト雖
 氏其ノ夙ニ鹿兒島ノ海港ヲ封シ賊徒ヲシテ海
 上ノ運轉ヲ失ハシムルニ非ズンバ或ハ羽翼ヲ
 九州中國四國ノ間ニ展スニ至リシモ知ルヘカ
 ラス而シテ賊徒ガ全リ運用ヲ海上ニ失フテ專
 ラ進攻ヲ陸地ニ試ミ肥後ノ地境ニ阻絶セラル
 二至リシハ實ニ海軍カ封港ノ功ナリト言フ
 ベシ其他數々賊船ヲ逮捕シ彈藥輜重ノ缺之ヲ
 賊徒ニ及ボセシモ皆ナ是レ海軍ノ功ニシテ其
 怒濤ニ旋回シ在瀾ニ起臥シ以テ軍事ニ軟掌シ

賊勢ヲ挫折シタルノ勲績ハ亦々偉大ナリト言
 ハザルベカラス而シテ陸軍ノ勤勞ニ至リテハ
 更ニ著ルシキ者アリ熊本鎮臺ハ始ノテ交戦ヲ
 去ル廿一日ニ開キシヨリ敢テ連日ノ戦争ニ疲
 困スル所ナリ四面攻圍ノ間ニ在テ能ク其城ヲ
 堅守シ高瀬山鹿ノ兩道ヨリ進軍ノ官兵ハ數回
 ノ烈戦ニ屈退セズ漸リ賊勢ヲ挫折シテ殆ント
 熊本鎮臺ト連合セントスルニ至レリ嗚呼其ノ
 匪勉努力力此ノ如クナレバ宜ク其ノ職分ヲ盡ス
 ノ厚キヲ嘆美シテ復々喋々ヲ要スル所ナカル

可シ夫レ然リ然ルモ我輩が猶ホ一言ヲ海陸軍
 ノ諸君ニ呈シ更ニ奮起振發ヲ冀望スルハ今回
 ノ戰爭タルヤ實ニ國家ノ進歩ト退歩ニ就テ容
 易ナラザル關係ヲ有スル者アルガ為メ也諸君
 モ必ラス明知セラルベシ今日ノ變動ハ我輩が
 之ヲ去ル廿二日ニ開陳セシガ如リ何リ迄モ封
 建ノ餘毒ヨリ發生セシ者タルニ相違ナシ此ノ
 封建ノ餘毒ヨリ發生セシ戰爭ハ佐賀ニ熊本ニ
 楸ニ前後數回ノ變亂ヲ現出セシト雖モ其ノ事
 件タルヤ敢テ全國ノ動靜ニ影響ヲ與フルニ足

ラス之ヲ撲滅スルモ亦タ極メテ容易ナリキ而
 シテ其ノ之ヲ撲滅シ得ルヤ從ツテ武士ノ威力
 フ滅殺シ國民ヲ以テ此國ヲ守ルノ勢ヲ振張ス
 ルニ至リシト雖氏猶ホ其ノ武力ヲ存在シテ封
 建ノ餘毒ヲ固結セシハ鹿兒島ニ在リシ也其ノ
 武カヲ固結スルノ以シキガ故ニ今日ノ變動ヲ
 發スルニ及ンデハ其ノ事件モ亦タ頗ル重大ニ
 シテ前日變亂ノ比ニ止マラスト雖氏苟モ之ヲ
 撲滅シ之ヲ不定スルニ至レハ武士ノ威力ハ此
 ノ一擧ヲ以テ全ク消滅シ封建ノ餘毒ハ此役ニ

於テ盡ク解散ト大イニ國家ノ体面ヲ一變セ
ハ絶テ疑フヘキ所ニ非ザル也
三月三日高瀬口ニテ大ニ戦ヒ官軍山ノ臺場ヲ
取ル翌朝未明ヨリ奮激攻戦山鹿口ハ岩村ニ進
ム是ヨリ益進激シテ一陣ヲ取ル毎ニ番兵ヲ置
キ不日ニ熊本ヘ達スベシト云又云日々連戦々々
フゴトニ大勝利高瀬口ノ官兵ハタバル坂ヲ抜
キ植木ヲ取タリ今一手ハキ千江山ヲ取り大久
保ニ向ヒ既ニ熊本ニ達ス山鹿口ハ互ヒニ激戦
追々賊ヲ打拂フ海岸ノ河内口モ官軍進撃必勝

ナラント
又云五日官軍益進撃シテ益勝利ヲ得タバルキ
千ジノ兩峠ヲ乗取り植木ヲ襲撃シテ熊本城へ
通路ヲ得タレバ最早連合スルナラント又山鹿
桐野隊ニテ據リシ要所ヲ襲フ尤河内ノ方ヲモ
同様進撃セシニ必勝ヲシメタリ又別働隊着シ
テヨリ大ニ進撃ノ順序ヲ得タリ福原大佐ハ激
戦中腹部ニ疵ヲ受タレドモ至テノ浅疵ナリト
官兵ガ植木ヲトリシハ木ノ葉吉次ノ兩道ヨリ
ニ手ニ分レテ進撃シ植木ニ合シテ遂ニ賊ヲ追

卷之二

八

七退ケタルナリト云
 黒田参議ハ博多ヨリ上陸シテ木ノ葉ニ赴レシ
 カ山縣参軍ト戦地ニテ逢レタリト云山鹿口ノ
 賊將ハ桐野利秋ニテ中々手強ク官兵ガ数度ノ
 進攻ニ固守シテ最モ激戦シタリト云
 勅使柳原議官ハ花房外務權大書記官ト共ニ長
 崎ニ着セラレ未ダ鹿兒島ハ出船ナシト
 松村大佐ガ船長トシテ直ニ鹿兒島灣ニ乗り入
 ニ為メ去ルニ日ニ神戸ヲ出帆シタル筑波艦ハ
 リルツブ砲百五十封度十二門ガテリン砲一門

元込クルツブ砲百五十封度一門ヲ備ヘテリト
 云今度ノ事件ニ付醫官ニテハ林軍醫總監ガ出
 張ニナリ戦地ノ醫事ハ盡リ林君ノ擔任ナリト
 云フ
 四日午後ノ戦争ハ官軍高瀬ヨリニ手ニ分レ一
 手ハ河内通リヲ進撃シ大ニ賊軍ヲ敗リ勝ニ乘
 ジテ高橋ニ至ル此軍ニ少佐聯隊旗ヲ賊ニ奪ハ
 レケルヲ野津此ニ野津ト云ヘルハ野津少将ナ
 ハ遙ニ之ヲ見テ馬ニ鞭ヲ加ヘ幕地グリニ敵中
 一馳セ入遮ル敵六人ヲ切テ落シ難ナシ旗ヲ取

返シ徐々ト味方ノ陣へ引返セシハ實ニ目覺シ
 カリケル働キナリト云又云同日夜三好野津ノ
 兩將ハ近衛一大隊鎮臺一聯隊ヲ引キ南ノ關ニ
 進ミ廿五日高瀬山鹿ノ兩所ニ出ツ高瀬ノ戰爭
 一時間ニテ官軍暫リ兵ヲ一ノ木へ引揚ゲ廿六
 日四百人ヲ繰入山鹿ヨリ進撃ス午前九時頃鍋
 田車返シ坂出張ノ大兵賊徒ト戦ヒ賊ハ間道ヨ
 リ來襲官軍大苦戰死傷數十人七本松迄引揚タ
 リ五時高瀬ノ進撃ハ近衛兵大勝利賊死屍彈藥
 ヲ捨テ敗走ス五日兵銳氣最盛ニシテ進テ木

ノ葉ニ到ル此口ニハ肥後ノ士族多分ナリシト
 云フ
 此度ノ騷擾ニ付テハ横濱寄留ノ外國人モ餘程
 心配シタトミエ寄留地保護ノ為有志兵ヲ編制
 セントテ其重立タルモノ三月六日グラントホ
 テル(大旅館)ニテ會合ヲナシタルト云
 過ル植木ノ戦ニ賊徒中ノ士官トモ覺レキ者ノ
 死骸ヨリ手帳ヲ奪ヒシニ三日迄ノ戰爭ニ死傷
 ノ數四百餘名ナリト記載アリシ旨ヲ三好少將
 ヨリ山縣參軍へノ届アリト云抑今度賊徒ノ暴

長久保

十

舉スルヤ西郷ニ於テハ戦争ノ見込ハ無リシト
 云最初暴徒カ彈藥掠奪ノ際三日日ニ西郷ハ私
 學校ニ歸リ来リ厚ク説諭ヲ加ヘタルハ疑ヒ
 ナシト雖モ斯ク暴舉ニ及ビシハ桐野カ首トシ
 テ暴徒ノ黨首トナリテ彼ノ中原ノ口書ヲ不シ
 事情斯ク如クナレバ足下ハ最早自ラ容ル、ノ
 地ナシ斯テモ猶同意セラレザルカ愈不同意ト
 アラバ到底免ルベカラザルノ自命ナレバ我々
 人手ニ頂戴シ然ル後大事ヲ發スベシ且ツ足下
 ハ平生ノ盟約ヲ忘レタルカト烈シク切迫シタ

リシカハ西郷モ曾テ征韓論ヲ以テ故郷へ退隱
 スル節桐野等ニ語リタル次第モ有リ旁々以テ
 免レ難キノ場合ニ至リ遂ニ同意ニ及ビタルナ
 ラン然レ氏西郷ハ猶深ク戰端ヲ開クコトヲ欲セ
 ザリシカバ出發ノ際嚴重ナル号令ヲ下シ若シ
 我命ヲ待ズシテ發砲スル者アラバ直チニ刑戮
 一處セント迄觸出セシヨシ蓋シ其見込ニテハ
 已ニ肥後地境迄繰出ス時ハ東京ノ親友必説諭
 ハ為熊本ニ出張スベシ其談判ヲ遂ゲタル上兵
 士ハ熊本ニ止メ説諭ノ諸士ト同行シテ東京ニ

到リ政府ニ尋問スル所アラントノ目的ナリシ
 カド推想セラル然ルニ遂ニ熊本ニ戦端ヲ開キ
 忽チ賊名ヲ取リシハイカナル都合ナリシカ西
 郷ノ為ニ甚ダ惜ムベキ次第也ト該縣ヨリ歸京
 ノ人ノ話ナリトノ風説アリト云肥前ノ士族ハ
 千人程申合セ西南暴徒征討ノ為メ出陣ノ義ヲ
 其筋一願出タリト尤兵器ハ有レ氏彈藥ハナシ
 ト云フ
 前ニ記載セシ賊船迎陽丸ヲ奪ヒ取リシハ八代
 沖ニ碇泊シ居タル所ヲ茂木網場邊ノ近海ヲ巡

視スル巡査ノ乗組タル浪華丸ニテ見付ケ使ヲ
 以テ何用アリテ此處ニ碇泊スルヤト尋タルニ
 米買入ノ為メ入港セシ由申立船長ハ不在ノ由
 ニ付代ノ者ヲ浪華丸へ連来リテ此方へ引渡ス
 ベキ旨ヲ申付シニ一向ニ肯ハザレハ直ニ取押
 へタリ尤賊兵モ乘来リケレド日奈久へ入湯ニ
 行シ留守中ナレハ船中へハ刀劍銃砲彈藥ナド
 ハ残ラズ捨テ置跡ニハ運輸士官一名ニ機關士
 一名水夫長一名水夫三十名ホド残り居タルヲ
 巡査九名ニテ看守ニ龍驤艦ニテ長崎へ引来リ

乗組ノ者ハ警察所へ拘留ニ成リシト云
 方今ハ八代熊木近海ノ商船ハ多ク暴徒ニ奪ハ
 レ船頭水夫ハ其人器量ニヨリ夫々殺務ヲ云付
 ラレ働キ居ルト三月二日神戸へ入港ノ東海丸
 ニハ九州ヨリ手負ノ鎮臺兵八十七名ヲ乗セ歸
 リシト又山腹高瀬口ノ激戦ニハ官軍モ手負ノ
 者多ク此内刀痕ノ者モ有シト云
 三月八日午前一時廿八分ノ電報ニ曰ク去ル六
 日田原坂ニテ大激戦賊ノ臺場ニケ所ヲ攻取リ
 タレ氏餘ノ五ヶ所ハ賊固ク守ルニ因テ官軍ハ

三古ヨリ進撃シ其ノ背ニ出テ奮戦數時ニ及ブ
 ト雖モ遂ニ落シ得ズ翌七日又々攻撃ニ及ビシ
 ガ午後一時頃マデハ攻落サズト云々
 黒田陸軍少將ハ玄武丸ニ乘リ込外ニ一隻都合
 ニ艘ノ軍艦ニ兵ヲ乗セ去ル五日ニ博多ヲ出帆
 シ鹿兒島ニ赴シ勅使柳原公ハ長崎ヲ出帆セ
 ラレ由ナレバ最早鹿兒島へ着セラレシナラン
 乗込及諸衛ノ軍艦ハ龍驤孟春春日ノ三艦ニテ
 三菱ノ汽船多人數ノ巡查兵隊ヲ乗セ行シト云
 警視局ヨリ西國船へ發向ナリシ方々ノ船迫田

國分江口三間ノ諸君ハ勅使ニ隨行鹿兒島へ
赴^{オモカ}上田永谷園田重信ノ諸君ハ巡查ヲ引卒シ
テ熊本城ノ綿貫君ノ手ニ合ヒラレ槍垣君ハ便
徑ノ道ヨリ肥後ノ大津街道ニ進マル、手筈十
リト去ル六日電報アリシト云
福岡縣不平士族賊ニ應ゼン一ヲ謀リシニ出張
ノ警官捕縛セシト又云延岡ニテ四百人高鍋ニ
テ百人程既肥ニテ二百五十人程佐原ニテハ
人數分ラズ是等ノ士族西郷ニ從軍ヲ頼ミ出立
スルニ就テハ驛々モ駱々シク夜中モ安眠スル

出来サリ工程ナリシト又云秋月議官ガ説諭
ノ為高鍋ニ赴レタルヨリ其士族ハ觀望ノ姿十
リト云
政府ニテハ今度ノ變動ニ付テハ四百万圓ノ目
算ナリ江ガ已ニ二百万圓余モ費用サレタルヲ
ナレハ最初ノ目算通りニ行難カラント云説
レド廟謨ノ一ハ下情ヲ以テ計リ難シト云々
三月十日東京丸ニテ出張ノ兵隊ハ東京鎮臺歩
兵第一聯隊第一大隊同大二聯隊第一大隊ニテ
此度第一後備軍ノ編成サレシモノモ此内ニ在

下云近頃賊徒ハ頻ニ我が將校ヲ狙撃スルノ模
 様アリ全リ賊兵ハ彈藥乏リナリタル故ナラン
 上云十ノ東京ハ一テ出テ又ハ東京ハ一テ出テ
 博多ハ官軍手簿ナリト思ヒ賊ハ其虛ニ乗ジ間
 道ヨリ同地ヲ突ントスルノ勢ナル由シノ風聞
 ナリト云
 鹿兒島追討記卷之七終

明治十年二月廿二日御届

發兌明治十年三月

編者 西野古海

第四大區一小區錦町二丁目十番地

東京 逐次室一助

出版人 木村文二郎

第一六區一小區馬喰町二
四目一番地

書林

逐次室一助

